



Title	時空と認知の言語学（12）（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2023, 2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同プロジェクト2022

時空と認知の言語学XII

井	元	秀	剛
王		周	明
高	橋	克	欣
瀧	田	恵	巳
春	木	仁	孝
渡	辺	伸	治

大阪大学大学院人文学研究科

2023

言語文化共同研究プロジェクト 2022

時空と認知の言語学XII

目次

井元秀剛	
自然言語で連言をあらわす「または」の意味について.....	1
王 周明	
日本中国語教科書の形式および内容変遷による啓示 (二)	
一拼音採用以前の中国語音声表記法ほかの実態概観一.....	10
高橋克欣	
談話解釈における時況節 <i>alors que</i> 節の機能.....	20
瀧田恵巳	
『デュランデ城』におけるダイクシス (その1)	
一版によって <i>her-</i> と <i>hin-</i> が入れ替わる事例を中心に一.....	30
春木仁孝	
現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現について	
一 <i>couleur</i> を中心に一.....	40
渡辺伸治	
<i>hin/her+gehen/kommen</i> の考察	
一ニーベルンゲンの歌とトリスタンの原文/現代語訳を資料に一.....	50

自然言語で連言をあらわす「または」の意味について

井元 秀剛

1. はじめに

論理学における連言 $p \vee q$ は「 p または q 」と読み、日本語では「または」英語では **or** が連言を表す接続詞である。 $p \vee q$ の真理表は

(1)

p	q	$p \vee q$
T	T	T
T	F	T
F	T	T
F	F	F

であり、 p と q の双方が真の場合も真となる。ところが自然言語の「または」は

(2) ハンバーグ定食には珈琲または紅茶がつきます。

で、珈琲と紅茶の両方を要求することはできないように、 p と q のどちらか一方だけが真の場合のみ、真となる読みが存在する。真理表にすると

(3)

p	q	$p \vee q$
T	T	F
T	F	T
F	T	T
F	F	F

となる。(1)の読みは「両立的選言(inclusive or)」、(3)の読みは「排反的選言(exclusive or)」と呼ばれるが¹、自然言語における「または」はこのどちらの読みも存在する。

(4) 暴風雨警報が 10 時までに解除されない、または阪急電車が止まっている場合、授業は休講である。

(4)は暴風雨警報が 10 時までに解除されず、阪急電車が止まっている場合でも休講であると読めるので、この「または」は両立的である。

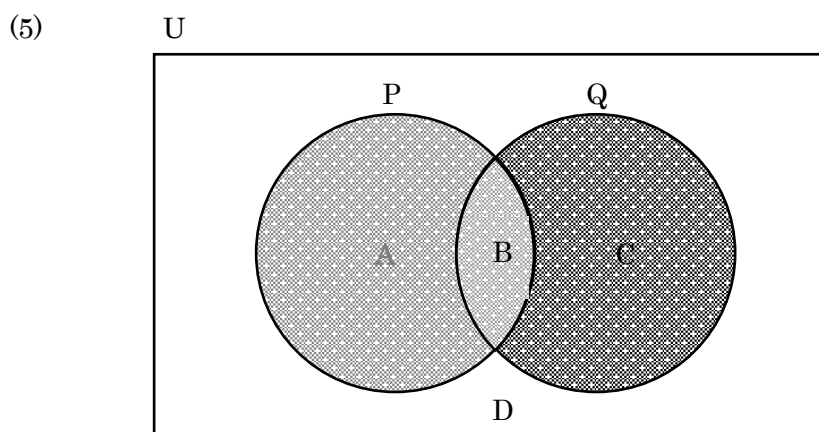
ここから以下の問いが生じる。そもそも自然言語における「または」には両立的選言と排反的選言の二つの意味をもつ多義語であるのか、それともどちらかの意味が基本であって、他方の意味はそこから派生したもの、と考えられるのか、またその場合どちらの意味が基本であるのか、あるいは、基本義は別にあって、双方の意味ともにそこから文脈によって派生してきたものであるのか、その場合基本義は何であるか、ということである。この論文はこ

¹ 論理和と呼ばれることもある。論理和は両立的意味を表しているように捉えやすいから、本稿ではあえて排反的の意味に捉えやすい「選言」の方を用いる。

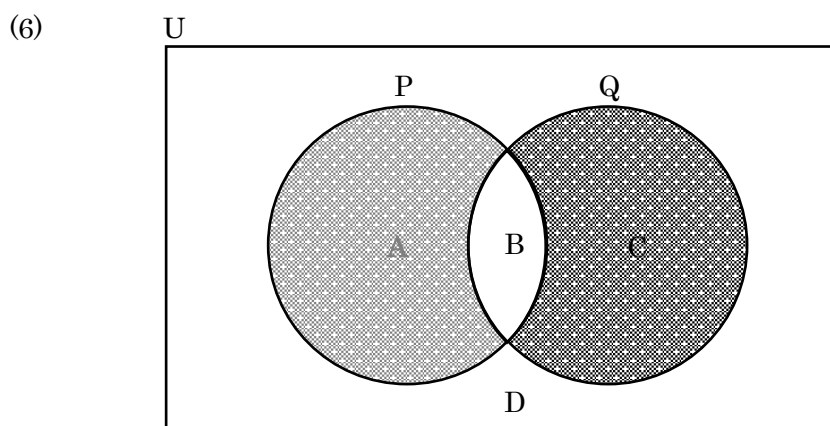
の問いに答えることを目的とする。例文の作成にあたっては「 p または q 」より口語的な「 p か q 」を用いることもある。(2)や(4)で「または」を「か」に置き換えても意味が変わることではなく、本稿では「または」と「か」を同値であるとして議論を進めていく。

2. 両立的解釈と排反的解釈の集合論的図式

論理学では、しばしばベン図を用いて集合論的に命題の意味を図示する。 p を満たす状況の集合を P 、 q を満たす状況の集合を Q 、全体集合を U とすると、両立的選言を満たす状況の集合は次のように図示できる。



ここで、図にあるように、 P ではあるが Q ではない集合部分を A 、 P でも Q でもある集合部分を B 、 Q ではあるが、 P ではない集合部分を C 、 A でも B でも C でもない集合部分を D とする。排反的選言は B の部分を含まないから以下のようなになる。



(5)や(6)にしても単に(1)と(3)を図示したものにはすぎないが、視覚的にはこの表示の方がわかりやすいことがある。

3. 多義の可能性

現実には「または」は両立的にも排反的にも使用されているわけだから、使用の現状は多義

的であり、「または」は多義語であると記述することに誤りがあるわけではない。しかし、多義といっても英語の **circle** は「円」と「仲間・グループ」を意味する多義語だが、「仲間」の意味は円陣をくんで集うというような性質があるために「円」の意味から派生したというように派生関係を論ずることは可能である。両立的意味と排反的意味は(5)(6)における A,C の部分は共通だから、多義であってもそのような多義を生む動機を探ることはできよう。さらに純粹に多義であるなら、その違いは真理値にしか関わらないので、主語と述語の結びつきによってどちらかの意味が排除されることは考えにくい。従ってどのような文であっても両方の解釈の可能性を基本的には持っているはずである。実際

- (7) あの店のドリンクバーはアルコールもおいてある。下戸の私はジュースかコーヒーしか飲まなかったが、酒好きの長老たちはワインまたは日本酒を思う存分に味わっていた。

では、筆者の語感では「ジュースかコーヒー(を飲む)」も、「ワインまたは日本酒(を思う存分に味わう)」も、両立的解釈が優勢で、私もジュースとコーヒーを飲んだであろうし、長老たちの中にはワインと日本酒の両方を堪能した人がいたであろうと読める。しかし、(7)をあくまでも排反的に読むことも可能である。私が瞬間的に飲むのは必ずどちらか一つであって、2つを同時に飲むことはなく、(7)の前半はその一回の行為を描写しているにすぎず、それが複数回生起する読みを拒否しないので、結果的に両方を飲むことになってもかまわない、後半については実際に長老たちがどちらかしかたしなまなかったとも読めるのである。しかしながら、(2)は排反的読み、(4)は両立的読みしかできないであろう。この場合、なぜ(2)と(4)が一方の解釈しか許容できないのかを説明する必要がある。(4)は

- (8) (p または q) ならば r

という構造をしている。このように条件文の前件に選言がおかれると、普通は両立的読みしかできない。今、p を「リンゴをもらう」、q を「柿をもらう」とし、「p または q」の意味を問題にする。

- (9) a. 顧客名簿に名前を書いた人はリンゴか柿をもらった。
b. リンゴか柿をもらった人は顧客名簿に名前を書いた。

「リンゴか柿をもらう」が「p(リンゴをもらう)または q(柿をもらう)」という選言を表す自然な日本語であることは問題ないだろう。この同じ p または q が、(9a)では排反的読みを、(9b)では両立的読みをほとんど強制する。(9a)でリンゴまたは柿を提供した主催者はどちらか一方だけしか与えなかっただろうと考えられるし、(9b)では、いろいろな果物を多数提供しているような会場で、リンゴと柿の両方をもらった人も顧客名簿に名前を書いたと読める。(9b)では「リンゴか柿をもらった人」の中にリンゴと柿の両方をもらった人も含まれるのである。無理に「リンゴか柿をもらった人」というのはあくまでリンゴか柿のどちらか一つをもらった人であって、その両方をもらった人のことについては述べていないと強弁する人でも、リンゴと柿の両方をもらっていないながら、「リンゴか柿をもらった人は顧客名簿に名前を書いてください」と言われて、自分は名前を書く必要はないとは思わないだろう。(9)

においてこの「リンゴか柿をもらおう」は(9a)と(9b)で本当に異なった意味をあらわしているのであろうか。またもし同じ意味であるとするならその同じ意味とは何で、どうして異なった含意をもつのだろうか。

この共通の意味について、言語直感のすぐれた話者から「p または q」の意味は

(10) p である、そうでない場合でも q である

という証言が得られたことがある。これを基に(9)における二つの意味を説明すると、まず、(9b)について、これは(8)の構造を内包している。よりわかりやすい文にすると

(11) リンゴまたは柿をもらえば、顧客名簿に名前を書く

である。(8)の構造では、選言の意味は(10)なので、p が成立した時点で前件(p または q)が成立するので必然的に r になる。このとき、q の成立の有無(真偽)は問題にならず、q とは無関係に(8)が成立する。(11)の例に則して言うなら、リンゴをもらった時点で柿の取得とは無関係に顧客名簿に名前を書くことになるのである。この後に柿をもらったからといってこの義務はなくなる。従ってこの p または q は両立的である。

これに対し、(9a)は

(12) r ならば(p または q)

という構造をしており、よりはっきりとこの構造を反映させた文にすると

(13) 顧客名簿に名前を書けば、リンゴか柿がもらえる

となる。(13)は(2)と同じようにどちらかしかもらえないという解釈が自然だろう。この(13)の場合も選言の意味は(10)であり、p である段階で、「p または q」は真になり、(12)が成立する。(13)の例ではリンゴをもらった段階で(13)が成立する。つまりリンゴをもらってしまったらその段階でもう(13)は成立し、もらう権利を使ってしまったのだから柿はもらえないという解釈がでてくるのである。この p または q は排反的である。

この(10)を出発点として(9)における二つの意味が生じることの説明はきわめて自然である。筆者も選言の本質の意味が(10)であることは否定しない。だが、(10)は p が真であれば、q の真偽とは無関係に、「p または q」が真になるということだから、q が真であっても全体が真であることは変わらず、真理表は(1)となり、両立的選言の意味に他ならない²。実際(11)の意味はここから自然に導かれる。問題は(13)である。(10)から p が真であるだけで「p または q」が真になる、ということが保証されているのだから、q が真である必要はないということまでは導けても、さらに強く q が偽でなくてはならない、までは導けないはずである。(13)においても、本来意味する内容は「p が真(リンゴがもらえた)なら q が真(柿がもらえる)となる必要はない」までであって、さらに進んで、どちらかがもらえることが権利であり、どちらかがもらえた段階でその権利が消滅するというのは、この文脈に特化した環境から来る推論にすぎず、p の偽は文の意味に環境が加わって生まれる含意(implicature)なのではないか、と考えることができる。

² (10)を論理式で書けば、 $p \vee (\neg p \Rightarrow q)$ となり、これは $p \vee q$ と同値である。しかしこの論理式は \vee が両立的選言を意味することを前提としているので、ここでの議論には役立たない。

実際(13)の「p または q」の場合でも 1 度成立したら二重に成立しない権利という解釈をうまない文脈の中におけば、排反の意味が感じられなくなる。たとえば、主催者側が ABC の三つのプレゼント袋を用意しておき、A にはリンゴとみかん、B にはみかと柿、C にはリンゴと柿をいれておく、顧客名簿に名前を書いた参加者にはこの 3 つの袋のうちのどれかをランダムに提供する、という状況を想定してみよう。ABC のどの袋にも「リンゴか柿が必ずふくまれているので、このような状況では

(14) 顧客名簿に名前を書けば、必ずリンゴか柿がもらえます
の発言は自然で、C の袋をもらう人もこの中に含まれている。つまり「リンゴか(または)柿がもらえる」は、両立的選言の意味で使われているのである。実際には(14)のように「必ず」のような副詞をいれたくなるが、副詞の有無で選言の意味が変わるわけでもないし、(13)のままでも両立的解釈が可能である。また、(14)も単独で文脈を示さずに用いられたら排反的読みの方が優勢だろう。

排反の意味が含意にすぎないことは、否定命題を想定することでも示すことができる。論理学における選言の否定は、有名なド・モルガンの法則があり、

$$(15) \quad \neg(p \vee q) \equiv \neg p \wedge \neg q$$

の式で示される。自然言語に直せば、「p または q」の否定は「p ではない、かつ q でない」である。p と q を上であげたリンゴをもらうことと柿をもらうこととすると、よりシンプルに書けば

(16) リンゴまたは柿がもらえる
の否定は

(17) リンゴも柿ももらえない
になるということである。(16)の否定が(17)であることは、自然言語の素朴な直感でも首肯できる。(17)は(5)のベン図における D の部分にあたる。命題 X の否定が表す事象は命題 X が表す事象の余事象であるから、(17)が(16)の否定であるということは(16)が表しているのは(5)の網掛け部分であって両立的選言に他ならない。もし(16)が(6)のような排反的選言を表すのであれば、その否定は(6)の白抜き部分である B か D でなくてはならない。実際(13)の選言部分を明示的に(6)を表す表現に代えて

(18) 顧客名簿に名前を書けば、リンゴか柿のどちらか一つがもらえますよ
とし、この発言を否定することを考える。

(19) a. そんなことはありません。先日ちゃんと名前を書いたのに、リンゴも柿ももらえませんでした。
b. そんなことはありません。先日名前を書いたらリンゴも柿ももらえましたよ。
これはどちらも自然な発言であり、D を表している(19a)も B を表している(19b)も否定として機能している。これに対し、(13)または(14)を否定するのに(19a)は自然だが、(19b)はよほど強く排反性を意識している話者以外は用いないだろう。逆に

(20) その通りです。私なんか、名前を書いたらリンゴも柿ももらえましたよ。

の方が自然である。(20)の話者はリンゴと柿の両方をもらったことが、(13)や(14)の反例になるのではなく、(13)や(14)が正しいことを補強する実例として提示しているのである。ここから、ことばそのものが表しているのは、リンゴをもらったら柿はもらえないかもしれない、までであって、もらえないというのはあくまでも含意にすぎないということなのである。

4. 含意が生じにくい環境

次に(9)のように、環境によって含意が出やすかったり出にくかったりする理由を考える。どのような環境で含意が生じ安く、逆にどのような環境で生じにくいのか、またそれはなぜなのか、という問いである。

(4)や(11)のように(8)の構造をした条件文の前件におかれた場合は、排反の含意を持ちにくい。条件文の前件と後件における伴立(entailment)関係を確認するために以下の文を考察する。伴立とは含意と異なり、元の命題から論理的に導出できる命題の関係を言う。

- (21) a. 大学生ならその映画を半額で見ることができます。
b. 阪大生ならその映画を半額で見ることができます。
- (22) a. その映画を半額で見たのなら、その人は大学生です。
b. その映画を半額で見たのなら、その人は阪大生です。

阪大生は大学生の部分集合である。阪大生も大学生であるから(21a)が真なら(21b)も真である。すなわち(21a)は(21b)を伴立する。しかし、逆の(21b)が真だからといって(21a)が真であるとは限らない。阪大生が半額で見られたからといって、他の大学の学生も半額になるとは限らないし、ここでは多分無理だろうという含意まで働く。一方、(22)では、大学生であるからといって阪大生であるとは限らないから(22a)が真だからといって(22b)が真であるとは限らない。逆に阪大生は大学生だから(22b)が真なら(22a)も真である。ここでは(22b)が(22a)を伴立している。(21)のように上位カテゴリーの言明が下位カテゴリーの言明を伴立する環境を *downward entailing context*、(22)のように下位カテゴリーの言明が上位カテゴリーの言明を伴立する環境を *upward entailing context* と呼ぶ。条件文の前件は(21)に示すように、*downward entailing context* である。また(5)のBにあたる「p かつ q」はABCの全体である両立的選言の「p または q」の部分集合だから、条件文の前件に「p または q」が置かれれば、「p かつ q」は伴立され、条件文全体は必然的に真になるのである。従って、p が真だからといって q が偽であるという含意は生じにくい³。素朴な感覚でいえば、「p または q なら r」という状況下では、条件 p を満たしただけでも r になるのだから、それに条件 q まで加わればなおのこと r になる、というだけで十分だろう。

5. 含意が生じる環境

それでは(9a)で排反の含意が生じるのはなぜなのだろうか。この含意は(12)で示した構造からは直接導かれぬ。実際(22a)が真の時(22b)が真であるとは限らないが、偽であるとい

³ 後に例をあげるが、絶対に生じないわけではない。

う含意までは生じない。また(12)の構造をもちながら排反の含意が生じない例も容易に作ることができる。

(23) 太郎は実に手が早い、きれいな女性を見ると、すぐに電話番号かメールアドレスを聞き出す。

(23)は、(12)の構造をもっているが、太郎が美女に電話番号とメールアドレスの両方を聞き出したからといって、(23)の例外であるとは受け止められないだろう。

(13)が含意を持つのはスケール表現になっているからであると思われる。そのことは後件の部分を値段に置き換えるとはっきりする。

(24) 顧客名簿に名前を書けば、500 円もらえます。

1000 円は 500 円を包含するから名前を書いて 1000 円もらった場合も(24)は真となる。しかしながら 1000 円はもらえないだろうという含意が働く。この含意は Grice の「量の公理 (Maxim of Quantity)」による説明が可能である。「量の公理」は”Make your contribution as informative as in required”と表現され、必要以上に与えてはいけないという意味も含んでいるが、求められる最大量の情報を提供しなければいけない、という意味でもある。もらえるのが 1000 円であれば、500 円もらえるというのは正しい情報ではあっても与える情報量としては不足で、1000 円と表現しなくてははいけないということである。つまり(24)が量の公理に合致した言明であれば、500 円がもらえる最大量なのだから、1000 円はもらえないという推論が働き、これが含意となる。

この論理はそのまま(13)にも適用できるだろう。もらうことのできる最大量として「リンゴと柿」ではなく「リンゴまたは柿」としか言えなかったのだから、どちらか一つをもらえるのが最大量で両方はもらえないだろうという含意が働いたのである。(2)の場合も同様で、ハンバーグランチに提供できるものとして、「珈琲または紅茶」としか表現できなかったのだから、どちらか一つが提供できる最大量であって、両方はもらえないだろうという含意が働いたのである。このようにスケールが介在すれば、含意が生じにくい条件文の前件におかれた選言でも排反性をもつことがある。

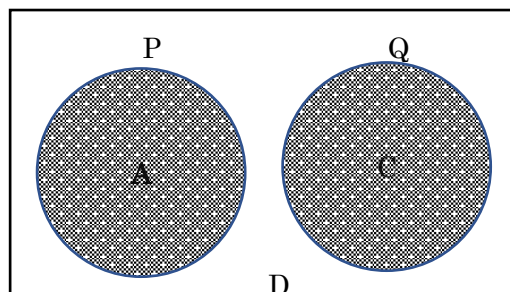
(25) 会場でリンゴまたは柿を食べた方は 500 円お支払いください。

(25)はフルーツバーのように何を食べてもよい、というような状況であればリンゴと柿の両方を食べても 500 円ですむ場合もあるかもしれないが、両方食べた場合は 1000 円支払わなくてはならないという読みも自然である。1000 円支払った場合でも 500 円支払ったことには変わらないから(25)自体は真であるが、足りないのではないかという含意が働く。リンゴと柿のどちらか一方と両方では価値のスケールが異なるわけだから値段というスケールが後件にたった場合、前件にもスケールの違いが働く。あえて量の公理にそって説明するなら、500 円の支払いが最大となる最大の条件として「リンゴと柿」ではなく「リンゴまたは柿」と表現したのだから、「リンゴと柿」はこの 500 円を最大量とする言明には含まれない、という排反の含意が生じているのである。

6. 含意から多義への拡張

上述したように排反の意味は基本的に含意なのだが、 p と q が排反事象の場合、図示すると

(26)



のようになり、 p かつ q である B の部分が存在しないから、排反は含意ではなく、文字通りの意味である。

(27) 太郎は今、東京か大阪にいる。

同一人物が東京と大阪に同時に存在することはできないので、(27)は意味論的に排反である。このように 1 つだけが該当する、という性質が意味論的にではなく、語用論的な環境として与えられる場合がある。

(28) 問 2 の正解は a か c だと思います。

(28)の発言者はどちらかしか正解ではないと思っているが、これは問題の正解は 1 つである、という状況から来るものであり、選言自体が排反の意味を導出しているわけではない。二つ以上の正解が許容される文脈で(28)が発話され、実際の正解が a と c の両方である場合、「その通りです。 a も c も正解でした」と答えても問題ないだろう。この場合は(28)を両立的選言と捉えたことになる。

(29) 「今日のお昼、カレーかラーメンにしようと思うんだけど」「それならカレーがいいな」

(29)も平凡な夫婦の会話だが、発言者も応答者も「カレーかラーメン」を排反的な意味にとらえている。この場合も昼食のメニューは 1 つである、という暗黙の了解が両者の中にあるからだろう。ところが、

(30) (カードマジックを演じる演者が客に向かって)

右か左のカードをめくってください。

だと、演者は場合によっては「右と左のカードをめくってください」と指示するようなこともあるのだから、予めどちらか一つという環境は成立していない。しかしながら(30)で客が両方のカードをめくることは許されていないだろう。あくまで排反的にしか解釈できない。これはなぜなのだろうか。あえてスケールを使って表現するなら、以下のようなになる。マジックの場では客は演者が許容する最小の動作しかとることが許されていないという前提がある。とりうる行為の最大量として「右と左」ではなく「右か左」と表現したのだから、ど

ちらか一つしか許されていないという含意が働く。

確かに(30)の背後にこのように構造があるのは確かだが、許容される動作のスケールというのは感覚的にあまりなじまない。排反の意味はしばしばどちらかを選択するという行為と結びつきやすく、選言という命名もここから来ているように思われる。選択に進む排反という意味はかなり広く自然言語において用いられているので、「p または q」がもつ多義的な意味になりつつある、という見方も可能なように思う。特に口語的な「p か q」にその傾向が強いだろう。つまり(30)は選択の含意を表現意図として選言を用いていると解釈することも可能な段階に来ているということである。そのため特に排反を拒絶するような環境でなければ、選言は両立的にも排反的にも読むことができる。

(31) 彼はいつもビールかワインを飲んで床につく

(31)は特に含意を生むような環境ではなく、ビールとワインの両方を飲んだ場合もこの事例になるだろう。しかしその一方で、どちらかしか飲まないという解釈も自然である。(7)や(31)などは選言が自然言語において多義性をもちつつあるということを示しているのである。

7. 結論

自然言語においても選言を表す表現「p または q」や「p か q」は両立的意味が基本であり、排反の意味は含意に過ぎないが、排反の意味も選択を伴うような場面で幅広く使われており、独立した拡張義という資格を備えつつある。

参考文献

Grice, Paul (1975). "Logic and conversation". In Cole, P.; Morgan, J. (eds.). *Syntax and semantics*. Vol. 3: Speech acts. New York: Academic Press. pp. 41–58.

須藤靖直 (2017)「スカラー含意研究の動向」『国立国語研究所公募型共同研究プロジェクト「推論の認知神経科学」』

日本中国語教科書の形式および内容変遷による啓示（二）¹ —拼音採用以前の中国語音声表記法ほかの実態概観—

王 周明

1. はじめに

日本においては、江戸時代の唐話²学習から現代まで、広義の中国語コミュニケーション能力を養成するという目的を達成するため、中国語学習に関する教本³は様々な形式と内容で数多く世に出されており、その種類は二千を超えるとされている。

その中で、中国語音声表記法の面では、1958年10月に中国の時代出版社によって刊行された『汉语教科書 Modern Chinese reader』上下2冊⁴が境目となり、拼音(ピンイン)採用以前の次から次へと候補を試行する模索時期と拼音採用以降の統一／定着時期に分けることが出来る。後者の統一／定着時期において、ローマ字のアルファベットおよび一定の声調記号を用いて中国語の共通語の漢字の読み方を示す、拼音という音声表記法は1958年2月に中華人民共和国の漢語拼音法案⁵として制定・採択され、そこで中国発外国人学習者向けの中国語教科書に直ちに採用され、さらにそこから六十五年後の今日において、すでに世界中の外国人中国語学習者が中国語の発音を学習する際に必ず利用すると言えるほど普及されてきた。一方、前者の模索時期の全ての段階において、中国語の音声を一般の日本人学習者により理解しやすく、または習得しやすくする方法についての試みは、教科書作成において重要な一環でありながら、解決困難な課題とされていた。編著者たちは、時代の要請に合わせて、中国語音声表記法についてさまざまな候補の試行を繰り返していた。

本稿では、江戸時代の唐話学習の背景は明治以降のものと根本的に異なるため、明治時代以降の日本において拼音採用以前に出版されたいくつかの中国語教科書に着目し、中国語音声表記法の各実態を概観する。また、当時の社会情勢や文化的要素と結びつけながら、言語学的な変遷から明らかになる日本人の中国語音声学習の試みを異文化理解の視点から再評価し、考察してみる。

1. 中国語音声表記法の新しい出発点となったウェード式表記法

¹ 本稿は科学研究費基盤研究B「異文化理解における外国語教科書の役割—中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として—」（課題番号19H012820）による研究成果の一部である。

² 江戸時代の中国語に対する通称。

³ 中国語教本には、一般教科書の他、独習書や辞書なども含まれる。

⁴ この教科書は早くも日本に伝わっており、中の本文、例文および練習問題がもとのままにされておく以外、新出単語に日本語の訳語・説明文の中国語原文が残るまま段落ごとに日本語の訳文が付け加えられ、1960年11月に光生館によって日本語版『中国語教科書』上下2巻として刊行された。さらに、1969年に説明文の中国語原文を全部削除して上下2巻まとめて『合本 中国語教科書』一冊として再刊された。

⁵ 中国語原文：汉语拼音方案。1958年2月11日の第1期全国人民代表大会第5回会議で採択された。

世界初の北京語教科書——トーマス・ウェード『語言自邇集』(1867年初版、1886年第2版)の出版意義について、高田 2001: 132, 141-142 は下記のように述べている。

…諸外國における中國語學習の方向を決定づける役割を果たした。…日本でも翻刻や抄出本が出版され、明治期の中國語教育に大きな影響を與えている。…民國が成立してのち、國音の標準問題で、おなじ五聲體系を巡って喧喧諤諤たる議論が繰り広げられることになるが、實はそのころにはすでに北京語の勝利は國際的には決定されていたのである。言語そのものの變化と發展はもとより自律的なものであるが、社會の諸關係の中に占める言語の地位は、時代や各種條件によって位置づけられる。とりわけ近代においては廣い意味での外交、すわなち國際關係が決定的な力を發揮する。もちろん變化を人々が感得するには長い時間が必要であつて、中國における言語規範が南京から北京に移動するにも、明代以來數百年の時間がかかっている。ウェイドの『語言自邇集』の出現は、その規範變化の成立點に立っているのである。

(高田 2001 年より抜粋、下線部は筆者による)

『語言自邇集』には、19 ページにわたって發音編が収められており、そこで見られた中国語(正確には、標準語化される前の北京語)の音声表記法は一般的にウェード式と呼ばれている。この方法では、例えば「小 hsiao3」のように、各漢字の音声を[ローマ字の綴り+綴りの右上に声調(アラビア数字1~4で示される)]という形式で示される。さらに、音声表記上で有気音と無気音の區別を重視し、四声の調類名称およびその高低變化の違いについても重要な説明がなされており、これらは日本の中国語教科書に大きな影響を与えていた。ここで、張衛東 2012 による中国語訳文を挙げておく。

第一声是“上平”，或叫高平调。

第二声是“下平”，或叫低平调。

第三声是“上”，或叫升调。

第四声是“去”，叫降调或去声。

第一声称“高平”，足以表明，一个词不论发音快慢，它的音既不升高也不降低。我们的一位汉学家已正确地称之为“肯定”的声调。

第二声称“低平”，发音急拉上扬，很像说英语表示疑问或惊讶那样。

第三声称“升”，发音近乎急而陡，很像我们表示愤怒和否认的语气。

第四声称“降”，音被拖长，很像我们表示懊恼、遗憾的语气。

2. 『語言自邇集』の北京語声調認識の受容実態

明治期における中国語教育の最初の背景は、明治前期の日中両国の外交需要に応えるため、中国語の通訳養成が急務となったことにあった。この時期、日本政府は江戸時代の南京官話から北京官話へと中国語の言語規範の転換を図ろうとした。しかし、北京から来たネイティブ教師以外、東京外国語学校漢語学科の中国語教師を含め、日本国内で北京官話の音声を知る者が殆どおらず、また利用可能な教科書も存在しないという困難に直面した。

こうしている中で、『語言自邇集』初版の影響を受け、明治前期に『北京官話伊蘇普噲言』、『亜細亞言語集支那官話部』と『支那語独習書』が相次ぎに出版され、明治期の中国語教育にかなりの影響を与えていた。

2.1. 中田敬義[訳]『北京官話伊蘇普噲言』(1879年)の場合

渡部温に託された英文書を北京留学中の中田敬義が北京人の英紹古父子の助力を得て、翻訳書という形で明治12年(1879年)に東京で刊行された『北京官話伊蘇普噲言』は日本初の北京語教科書として、まさに上記の明治前期の社会情勢によってできたものである。そこで見られる音声表記に関する内容は本文の欄外に記され、その特徴は以下の通りにまとめることができる。

北京音に関する提示が58カ所となる中、49カ所が直音法(例えば: 鵠、音瓜／露、讀作漏など)で示され、1カ所は反切法({口餒}、音餓伊切)が用いられ、20カ所は調類名称(上平・下平・上聲・去聲)が用いられている。

堅固な漢文基礎の持ち主である中田敬義の音声表記には、中国古典に由来する伝統音韻学の直音法と反切法という表記法が用いられながらも、北京語の四声の提示に『語言自邇集』からの直接影響も覗える。更に興味深いのは、筆者が確認してみたところ、58カ所の北京音に関する提示はいずれも『語言自邇集』に触れられていないものである。『語言自邇集』と照り合わせながら、その遺漏を補うという意図を中田敬義の中にはあつたに違いないだろう。六角1999によると、北京留学中の中田敬義は『語言自邇集』と早々に出会った。しかし、説明などが英文で書かれたのもあり、斬新なウェード式表記法を短期間内に吸収しきれず、声調の部分しか参考できなかったのはむしろ想像が付きやすいことであろう。それ故、『北京官話伊蘇普噲言』は直ぐにそのまま中国語教育現場で使用可能な教科書にならず、実際に広く読まれた読本にとどまってしまったようである。

2.2. 廣部精[編]『亜細亞言語集支那官話部』(1879年)の場合

廣部精が『語言自邇集』の「散語」「問答」「談論」を底本として編輯した『亜細亞言語集支那官話部』に見る中国語音声表記の示し方の特徴は付録の図①で示される、巻頭の凡例の説明順によると、下記の通りになる。

各章の冒頭の一列に、主な漢字の音声について、先ず漢字の右側に「五音拗直五位圖」に基づく「國字」(＝カナ表記)を用いて縦書きで記され、そして漢字本体をめぐり左下から右下まで時計回り順の四角圏点法で四声が示される。有気音については、四声の圏点を黒塗りして示される。

こうした音声表記法は、有気音を表記する点がウェード式に通じる以外、江戸時代の岡山冠山による唐話教本類に見る表記法を受け継いでいるように見える。そこで、四声の四角圏点法と有気音の黒塗り法は日本における中国語音声表記法の中で不可欠な日本的要素として定着しており、長い間にわたって存続していた。

また、北京語の四声については、それぞれの高低変化を順に「平而安／平而輕／上而猛烈

／去而衰遠」⁶として感覚的で描写的言葉を用いて説明され、南方方言のような入声と濁音が存在しないことも強調される。但し、『語言自邇集』における四声の高低変化の説明には母語英語との対照が含まれ、より実感しやすくなるのに対して、『亜細亜言語集支那官話部』ではこのような対比的な説明が行われていない。

2.3. 宮島大八[編]『支那語独習書』(1900 年)の場合

『支那語独習書』における音声表記、カナ表記、そして四声の四角圏点法から有気音の黒塗りまで、これらはいずれも『亜細亜言語集支那官話部』の影響を受け継いでいるように思われる。一方、継承とは言え、『亜細亜言語集支那官話部』の「五音拗直五位圖」のような複雑な関係図有を避け、巻頭の凡例では、重音(有気音)/軽音(無気音)・廣音/窄音・捲舌音/舌尖音・開口音/合口音の両兩対立のように発音の概略的な説明がなされている。但し、本文の発音の部分では、個々の音の発音方法は一切記されていないため、六角恒廣による解題では、『支那語独習書』は独習に本当に向いているかとも疑問視されている。

また、四声の高低変化について説明が行われた際に、『亜細亜言語集支那官話部』に沿って感覚的で描写的言葉が用いられているが、それぞれ「響キノ差」として表現され、「平易二發シテ、些ノ低昂ナキ／聲尾昂リテ、人ノ物二驚キテ失聲セシ如キ／發音ノ猛烈ニシテ、長ク語尾ヲ引クモノ／語尾ノカヲナクシテ、人ノ嘆聲ヲ發スル如キ」と述べられている。『語言自邇集』ほどの対照がないが、高低昇降の特徴が失声や嘆声などの譬えによってより具体化され、より実感しやすくなり、そして四声の発音実践により利用されやすくなるだろう。

最後に本文構成に関する一点を挙げたい。15 頁の発音と 2 頁の四声が独立して、語句学習の部分に先立って発音基礎の部分構成している点は『語言自邇集』に類似しており、日本の中国語教科書における本文構成の突破と言えるだろう。

2.4. 受容実態のまとめ(一)

今後の中国における北京語の重要性が認識され、『語言自邇集』を追い越し、教科書の作者達は早々に教科書名に北京官話、支那官話または支那語といった名称を用いるようになった。『語言自邇集』が明治前期の中国語教科書に与えた影響は、主としてウェード式表記法ではなく、江戸時代における中国語の言語規範である南京官話と大きく異なる、それまでに知られていなかった北京語の声調に関する新たな情報にあった。

3. ウェード式表記法の受容および変容

[ローマ字の綴り+綴りの右上に声調(アラビア数字 1~4 で示される)] でできたウェード式表記法は、そのローマ字の綴りは一見すると複雑に見えるが、徐々に日本の中国語教科

⁶ 筆者訳：平坦で落ち着く／やや軽く上昇する／急激に上昇し強くなる／急速に下降し弱まる

書においても受け入れられるようになってきた。

3.1. 興亜会支那語学校[編]『新校語言自邇集 散語ノ部』(1880 年)の場合

『新校語言自邇集 散語ノ部』も早い時期に出版されたものだが、2.1. ～2.3. の3種と異なり、日本的要素が一切加わらず、『語言自邇集』の「散語」一章を抽出して僅かに原文の字句を書き換えてできた一冊である。そこで見られる中国語音声表記法の示し方の特徴は以下の通りである。

各章の冒頭の一行に、主な漢字の音声をもとのウェード式のまま〔ローマ字綴り＋綴りの右上に声調（アラビア数字 1～4 を用いる）〕で示される。

ウェード式表記法はこの形で初めて日本本土に導入されてきたが、それに伴って現れた問題は、このようなウェード式のコピーバージョンには『語言自邇集』の発音編のような解説が欠けていることである。つまり、ウェード式表記法の真髓が未だに理解されていない状態のままになると、暫くの間は中国語音声の習得にはあまり役立たないと想像される。

3.2. 瀬上恕治『日文對照官話問答新篇』(1907 年)の場合——和洋折衷の音声表記法

『日文對照官話問答新篇』における和洋折衷の中国語音声表記法は下記の通りである。

本文欄外に、冒頭に黒塗りの有無で無気音と有気音を区別する点が注記され、それから本文から抽出された各漢字の本体に四角圏点法で声調が示され、漢字の下側にウェード式のローマ字綴りとなる。

しかし、ウェード式のローマ字綴りには、「車」のように chē と表記されるべきところが che と間違えられ、「身」のように shēn と表記されるべきところが shen と誤植されるなど、ê が e に誤って使われる箇所が多く見受けられる。また、「神」のように shēn と表記されるべきところが shēng と誤植されるなど、-n と -ng の間違いも点在している。これらの誤りから判断すると、ウェード式のローマ字綴りにはあまり慣れ親しんでいないと思われる。

その他、本文の一部文字の傍らに | の符号が用いられ、対話語句中の「重念」または対話中の「調子／腔調／アクセント」が表されている。

3.3. 張源祥『支那語の會話』(1939 年)の場合——和洋の音声表記法の併用

李无未 2004 によると、辞書類に属している『日清字音鑑』(1895 年)⁷の本文には漢字字音の図表があり、漢字の左側にウェード式表記法、右側にカナ表記となっている。

『支那語の會話』における和洋の音声表記法を併用する状況は以下のようである。

本文の各漢字に四角圏点＋カナ表記で音声が表示される他、会話欄の下側に各文の音声が再びウェード式で表記される。

このように二重保険掛けの上、レコードにも録音されており、学習に非常に便利になっているだろう。

⁷ 伊沢修二・大矢透 1985 『日清字音鑑』、大日本図書株式会社。

3.4. 受容実態のまとめ (二)

ウェード式の完全なコピーバージョンから始まり、和洋折衷の音声表記法の採用、そして和洋の音声表記法の併用へと進化する過程は、受容プロセスにおける変容と言える。孫云偉 2021 の考察によると、宮島敏吉 1931『支那語四週間』⁸は注音符號（関連ものとしての声調符号）、ウェード式のローマ字表記、そして仮名表記を包括的に収録することにより、仮名表記の改善を達成した。この意味で、受容プロセスにおける変容はより正確に北京語の音声を表記するための工夫を凝らした結果の現れと言えよう。

4. 日本の中国語教科書における中国本土発の中国語音声表記法の受容

中国本土発の中国語音声表記法には、伝統音韻学の直音法や反切法があった。さらに、拼音以外でも、一定の期間において相当な影響力を持った表記法として、注音符號（声調符号を含む）、国語ローマ字、およびラテン化新文字が存在しているまたは存在した。

注音符號と国語ローマ字とも中華民国にて制定された中国語の音声記号である。注音符號は、その考え方が漢字の偏旁を簡略化してできた日本の仮名に由来している。最初に公式に発表されたのは 1918 年であり、当初は国音字母と呼ばれ、39 文字の異なる配列となっていた。しかし、国民革命後の 1930 年に注音符號と改名され、1932 年には北京音を基準にした新しい国音が定められ、文字数は 37 になった。四声の表記方法は、1922 年に旧式の四角標圈法が廃止され、声調符号（(一) ˊ ˋ ˊ ˋ）に変更され、注音符號の右側で表記されるようになった。

国語ローマ字は、1928 年にラテン文字によって制定されたもので、記号や数字を使用せず、綴りを変えることで声調を表せることが特徴である。

ラテン化新文字は、1929 年に文盲教育のために漢字の廃止を前提としてラテン文字によって作成されたもので、声調を表すための工夫は殆どされていないという特徴がある。

4.1. 藤木敦實・麻喜正吾『標準支那語會話教科書 上巻(基礎篇)』(1939 年)

当該教科書は、初版から僅か 2 年で 31 版までの成功した発行を達成した。その理由を本文構成上の特徴と音声表記上の特徴から考察してみたい。

本文構成上では、発音篇と会話基礎篇の 2 つの部分から成り立っている。発音篇では、学習内容が四声、韻符、結合韻符、声符の順序で提示されている。特に四声の高低昇降やおおよその調値に関しては、図②の五度標記法によって直感的な理解が容易になった。また、日本人にとって難しいとされる発音方法は図③のような図解によって視覚的に表現され、可視化されている。

音声表記上では、本文の会話文の下部には各漢字に対してウェード式表記法と注音符號

⁸ 宮島敏吉 1931『支那語四週間』、大学書林。

(声調標記なし) が使用されている。

これらの特徴により、本教科書は多くの支持を得られたようである。

4.2. 倉石武四郎による発音教育への連続的挑戦

4.2.2. 『支那語發音篇』(1938 年)と『支那語發音入門』(1942 年) ——言語学的解説・言語教育の理論と実践の視点から注音符號・国語ローマ字を採用

『支那語發音篇』は当時すでに常識になっていたウェード式に否定的な態度が示され、別売のレコードより発音が聞かせられ、注音符號の導入に全力が注がれた。実用性の他、言語学的性格も強い。9 頁にもわたった凡例の前半だけでも、『説文解字』に基づいて各符號の漢字由来(文字学)、標準音の四声の標記方法および旧四声との関係(音韻学、四声の名称改正:(旧)上平/下平→陰平/陽平)、音節表の音理(音韻学と音声学)について非常に詳しい説明がなされている。

本文のほうは【字+語彙】の発音内容からなるが、倉石は国語ローマ字を用いて体系的に韻符→声符→音節の順で逐語的に全ての発音の音理をも説明している。

『支那語發音入門』になってくると、言語学的な性格が消え、言語教育が主体になっている。大いなる特徴の一つは国語ローマ字が使用されず、基本的な発音方法が図④のように【写真+図解】の提示によって可視化されている。

また、前述の二種に加え、1940 年に弘文堂から出版された『倉石中国語教本 卷一』も注音符號を使用しているが、言語学的な性格や可視化された発音方法の面では特に何にもないため、本考察の対象から除外された。

4.2.3. 『ラテン化新文字による中国語初級教本』(1953 年) ——ラテン化新文字への先駆的な試作

音声表記上の特徴と言いにくいかもしれないが、耳と口の訓練に重点を置く場合、脱漢字が効果的だと倉石は考えている。そのため、ラテン化新文字の本文は別売の「中国語模範會話」レコードに吹き込まれ、実験音声学の手法を用いて機械による吹き込みの音波の測定が行われ、そこで得られた図表は教科書に収録された。(附録に漢字と注音符號によるテキストが収録)

4.2.4. 『PINYIN ZHONGGUO-YU yufa ローマ字中国語語法』(1969 年) ——耳と口との訓練に重点を置きつつ、脱漢字の続編

倉石による当該教科書の位置付けは、中国語を話せるようになるための一種の練習帳として捉えられる。本来ならば、練習問題においての「次の文を中国語で書きなさい」というべきところが、「次の文を中国語でいいなさい」となっており、引き続き重点が耳と口の訓練に置かれ、口頭作文が要求されている。

5. おわりに

社会情勢の面では、中国語の教育機構は明治初期に外務省所属の漢語稽古所から漢語学所へと改名され、その2年後には文部省の管轄下にある外国語学所へと移管された。さらに、すぐに東京外国語学校と統合され、4年後には東京商業学校に吸収合併されて第三部となった。そして、その11年後には語学部と改称したが、僅か1ヶ月後には語学部が廃止され、生徒は商業学校へと移籍するという事態が発生した。

こうした変遷の連続する学校事情から、中国語は外国語としての英語、フランス語、ドイツ語に比べて地位が低く、不安定なものとなっていることが覗え、また専門的教育人材の確保も困難な状況が見受けられる。その後、多くの中国語教科書は専門的な知識を有する者によって作成されるのではなく、一般の民間人によって作成される傾向が強くなり、また、一時的に速成教材が流行していたことも当時の社会情勢と深く関係していると言えるだろう。

一方、『ラテン化新文字による中国語初級教本』のはしがきに、下記のことが書き記されている。

日本人は漢字の日本的常識を応用して中国の漢字文を読んだつもりになりがちであるが、これが日本人全体として中国語を軽く考え、自然、中国語の学習意識を低下させた大きな原因である。

文化と言語的側面においては、長年にわたって漢文学習を行ってきた日本人にとっては、仮名表記が不可欠な要素となっている。このため、伝統的な観念——「仮名表記依存症」に縛られながらも、中国語の音声学習に取り組むと、その音声の本質的な側面に辿り着くことが困難であろう。明治時代から昭和中期までの間、中国語の音声表記におけるカナ表記の改善が数多くの中国語教科書で試みられたが、その成果は極めて限定的なものだった。

荒木氏 1981 による厳しい批判を受けた「日本語的支那語」は、まさに上記の内外の要因によって形成されたものである。

そのため、倉石武四郎の言葉「母国語習得の場合と同じく、すでにある国語の音声を知っている人に、それぞれの音声に対応する文字を教えるのが自然の順序である」という指摘が適切である。彼の中国語学者としての連続的な挑戦(4.2 節参照)は、中国語の主体性が中国の人々に存在することを冷静に認識しながら行われた試みと言えるのである。

【検討対象とした中国語教科書（刊行順）】

中田敬義[訳]1879『北京官話伊蘇普噲言』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

廣部精[編]1879『亜細亜言語集支那官話部』(1892 年再版)、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

興亜会支那語学校[編]1880『新校語言自邇集 散語ノ部』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

宮島大八[編]1900『支那語独習書』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第二巻』、不二

出版

- 瀬上恕治 1907 『日文對照官話問答新篇』、(東京)東亜公司
- 倉石武四郎 1938 『支那語發音篇』、弘文堂書房
- 藤木敦實・麻喜正吾 1939 『標準支那語會話教科書 上卷(基礎篇)』、光生館
- 張源祥 1939 『支那語の會話』、(神戸)東方学藝社
- 倉石武四郎 1942 『支那語發音入門』、弘文堂書房
- 倉石武四郎 1953 『ラテン化新文字による中国語初級教本』、岩波書店
- 倉石武四郎 1969 『PINYIN ZHONGGUO-YU yufa ローマ字中国語語法』、岩波書店
- 北京大学外国留学生中国語文專修班・光生館編集部[編](1960) 『中国語教科書(日本語版漢語教科書縮刷版) 上・下巻』、光生館、上巻:1962 年第 5 刷+下巻:1961 年第 4 刷
- 北京語言学院・香坂順一[編]1969 『合本 中国語教科書(日本語版漢語教科書縮刷版)』、光生館、1987 年第 17 刷

【参考文献】

日文文献

- 荒木修(1981)「中国語発音学序説」、『茨城大学人文学部紀要(人文学論集)』第 14 号:pp. 1-17
- 王周明(2022)「中国語教科書に見る「中国語」および「中国」—1950 年代後半~80 年代前半中国原編日本改編のものを中心に」、『時空と認知の言語学 XI(大阪大学大学院言語文化研究科・言語文化共同研究プロジェクト 2021)』: pp. 1-10
- 倉石武四郎(1941)『支那語教育の理論と實際』、岩波書店
- 倉石武四郎(1973)『中国語五十年』、岩波書店
- 孫云偉(2021)「昭和初・中期北京語語音における仮名表記の改善—『支那語四週間』を中心に—」、『中国言語文化学研究』第 10 号: pp. 73-81
- 高田時雄(2001)「トマス・ウェイドと北京語の勝利」、『西洋近代文明と中華世界—京都大学人文科学研究所 70 周年記念シンポジウム論集』: pp. 127-142
- 李无未(2004)「清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の、日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかりに—」、『日本文藝研究』第 56 巻第 2 号: pp. 1-19
- 六角恒廣(1999)『漢語師家伝』、東方書店

中文文献

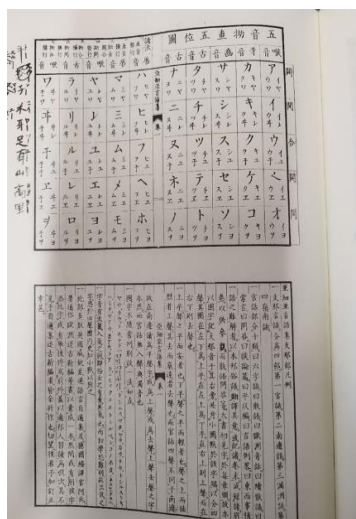
- 王周明(2021)「《北京官話伊蘇普喻言》的口語性相關問題試探」、『言語文化研究』第 47 号: pp. 25-43
- 王周明(2022)「日本漢語教科書形式與内容變遷的啓示(一)——以其江戸明治時期漢文背景的變化為中心」、『言語文化研究』第 48 号: pp. 21-37
- 威妥瑪[著](1886) 張衛東[譯]『語言自邇集(第二版)』、北京大學出版社(2012)

中田敬義[譯](1879)《北京官話伊蘇普喻言》、六角恒広[編]『中国語教本類集成第一集第一卷』、不二出版：pp. 171-216

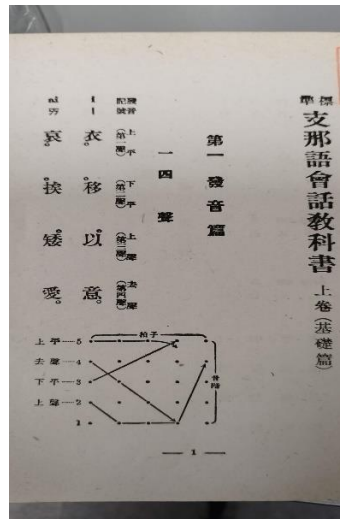
張西平[主編](2019)《漢語作為第二語言教學史研究》、商務印書館

【付録】

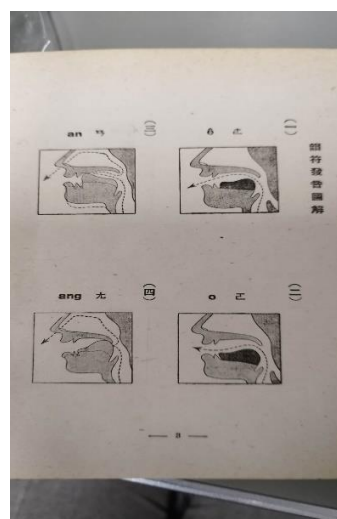
図①



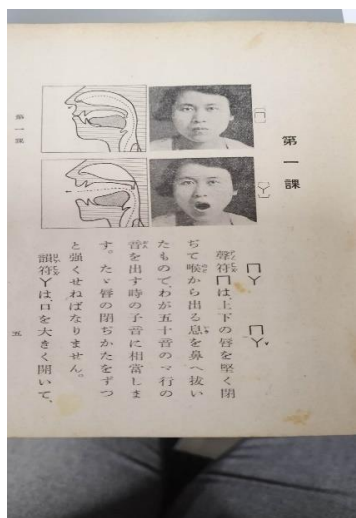
図②



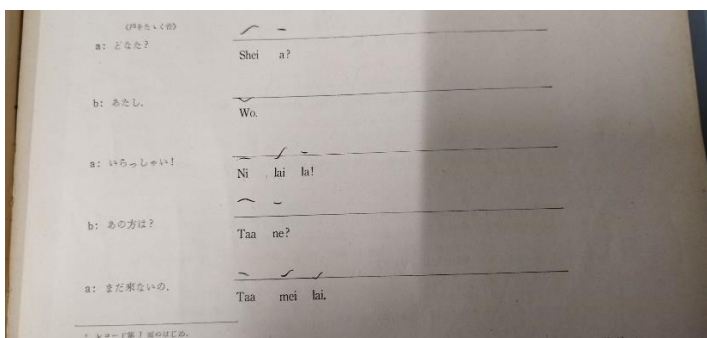
図③



図④



図⑤



談話解釈における時況節 *alors que* 節の機能

高橋克欣

1. はじめに

筆者は高橋(2022)において、主節との時間的同時性をあらわす時況節である *quand* 節および *comme* 節が、主節に対して前置される場合と後置される場合の機能の違いについて、談話解釈の観点から考察した。本稿ではこれに続き、同じく主節との時間的同時性をあらわす時況節である *alors que* 節を考察の対象とし、その談話解釈上の機能について考察を行う。

本稿の構成は次のとおりである。まず 2 節で *alors que* 節の特徴について述べられた文法書等の説明を確かめる。続く 3 節では *alors que* 節のさまざまな実例を取りあげ、具体的な分析を行う。4 節では事態認識と時制形式および構文の選択について論じ、5 節では談話解釈の観点から *alors que* 節の機能を説明することを試みる。最後に 6 節で本稿のまとめを行い今後の課題に言及する。

2. *alors que* 節に関する文法書等の説明

ここではまず、*alors que* 節の実例の分析を行う前に、文法書等における *alors que* 節に関する記述を概観する。

Nouvelle Grammaire du Français では、*alors que* 節は、*tandis que* 節とともに同時性 (*simultanéité*) をあらわすと説明され、また対立 (*opposition*) や譲歩 (*concession*) をあらわす節としても取りあげられている¹。同時性、対立および譲歩の例として、次の(1)～(3)の例文が示されている。

(1) Julien est arrivé sans prévenir alors que nous étions à table.

(2) Cet été a été très chaud, alors que l'été dernier a été très froid.

(3) Marie n'est pas venue à mon anniversaire alors qu'elle m'avait promis de venir.

(1-3 : *Nouvelle Grammaire du Français*)

また、曾我(2011)では *alors que* 節について次のように説明されている。

6) はあらたまった文体の発話です。*alors* は、本来は「そのとき」を表す副詞で、6)ではコトと同時の状況 C を導いています²。ふつうのことばづかいの場面では、<*quand* 節>や

¹ *Nouvelle Grammaire du Français* での説明は次のとおりであり、*pendant que* 節と同じ機能を持つが対立のニュアンスを伴うという。

Ces deux conjonctions (=alors que / tandis que) ont le même sens que *pendant que* mais avec une nuance d'opposition.

² 曾我(2011)における例文 6)は、本稿の例文(4)に相当する。

<pendant que 節>を使うところです。

(4) Alain s'est intéressé aux mangas *alors* qu'il était étudiant à Paris. (曾我(2011))

アランはマンガに興味をもった，パリで学生だったころ³。

曾我(2011)の記述から分かることは，*alors que* 節は，事態の定位機能の観点からは *quand* 節や *pendant que* 節と同様に，主節であらわされる事態と同時に生起する事態をあらわすはたらきをもつこと，文体の観点からは *quand* 節や *pendant que* 節よりもあらたまった表現であるということである。

さらに，*alors que* 節の特徴として「観念の領域においてコトと対比的・対照的な C を表すときに，*alors* をよく使」うことが指摘され，次の(5)および(6)の例があげられている⁴。

(5) Léa regarde le JT *alors* que son frère prépare le petit déjeuner. (曾我(2011))

レアはニュースを見ている，弟が朝食のしたくをしているのに。

(6) *Alors* qu'elle aimait beaucoup lire avant, elle ne lit plus du tout. (曾我(2011))

彼女は前は読書が大好きだったのに，もう全然本を読まない。

曾我(2011)が述べるように，(5)の *alors que* 節は，主節であらわされる事態と時間的に同時に生起する事態をあらわしているが，(6)では主節であらわされる事態と *alors que* 節であらわされる事態の間には時間的なずれが認められる。このことから，*alors que* 節の機能として，主節の事態との同時性をあらわすことは常に成立するわけではなく，主節の事態と何らかの意味において対比されるべき関係にある事態をあらわすことがその本質的機能であるということが分かる。

これらのことをふまえると，談話解釈における *alors que* 節の特徴を次のように定義することができる。

談話解釈における *alors que* 節の特徴

alors que 節は，同時性や対立・譲歩など何らかの意味で，主節であらわされる事態と関連づけられる事態を談話内に導入するはたらきを持つ。

上で概観したように，文法書等では一般に，*alors que* 節の特徴として同時性のみならず対立・譲歩などのニュアンスを伴うことが説明されることが多い。このことは実際の用例においてどの程度当てはまるであろうか。次節では *alors que* 節および主節において用いられる

³ 例文の日本語訳は曾我(2011)による。

⁴ 例文の日本語訳は曾我(2011)による。

時制形式に着目し、実例の分析をつうじて *alors que* 節の談話解釈上の機能について具体的に論じる。

3. *alors que* 節の実例の分析

ここからは、現代小説において用いられた *alors que* 節を取りあげ、具体的な分析を行う。なお、次の(7)のように *c'est alors que*～の形で用いられる構文は分裂文の一種であると考えられ、別途論じるべき問題があるため、本稿では分析の対象として取り扱わない⁵。

(7) *C'est alors que je les vois : des clés sont accrochées sous le bureau de Starsky.*

(Valérie Perrin, *Les oubliés du dimanche*)

3. 1. *alors que* 節が対立をあらわす場合

文法書等で、対立の意味をあらわすとされる *alors que* 節の用例としては、次のようなものがある。

(8) *Calme-toi, Odette, calme-toi. Alors qu'elle avait plus de quarante ans, son cœur s'embattait*

aussi vite que celui d'une adolescente. (Eric-Emmanuel Schumitt, *Odette Toulemonde*)

ここで注目すべきことは、*alors que* 節および主節で用いられている動詞 *avait* および *s'embattait* がどちらも直説法半過去形であるという点である。過去の同時期に成立していた2つの事態を対立関係において捉えるために、このようにどちらも過去の状態をあらわす時制形式が用いられるのは自然であるといえる。

また、半過去においてのみこのことが成り立つわけではなく、2節で概観した *Nouvelle Grammaire du Français* で示された以下の例文においては、*alors que* 節および主節で用いられている動詞はどちらも直説法複合過去形の *a été* である。

(9)(=2)) *Cet été a été très chaud, alors que l'été dernier a été très froid.*

このことは、現在時制の場合にも当てはまる。

(10)(=5)) *Léa regarde le JT alors que son frère prépare le petit déjeuner.*

alors que 節と主節で用いられる動詞の時制形式がずれていても、対立の意味効果があらわれることがある。(11)では、*alors que* 節で用いられた直説法半過去の動詞 *aimait* と主節で用いられた直説法現在の動詞(ne) *lit (plus)* が、過去の状態と現在の状態との対立関係をあらわ

⁵ このような *alors que* 節について分析した論考として、渡邊(2015)などがある。

している⁶.

(11)(=6) Alors qu'elle aimait beaucoup lire avant, elle ne lit plus du tout.

3. 2. alors que 節が同時性をあらわす場合

一方、文学作品等で用いられた *alors que* 節の実例を観察すると、*alors que* 節と主節の事態の間にならずしも対立的な意味が認められるとは考えにくい例も散見される。そのような場合には、*alors que* 節が主節に前置されていることが多く、また *alors que* 節で直説法半過去形が用いられ、主節では直説法複合過去形や直説法単純過去形が用いられることが少なくないように思われる。以下では、異なる作品からの引用例を分析する。

(12) Surpris, je laissais tomber ma lampe torche. Alors que je me baissais pour la ramasser, je vis soudain la porte qui se refermait sur moi. (Guillaume Musso, *L'instant présent*)

(12)では、落としたランプを拾い上げるという事態と突然扉が（再び）閉められるのを見るという事態が対立的な意味関係において捉えられているとは考えにくい。むしろ、ここでの *alors que* 節は、主節の事態が生起する場面を提示するはたらきをしているというのが自然な解釈ではないであろうか。

次の(13)も、状況把握を容易にするためにやや長めの引用となるが、やはり *alors que* 節であらわされるエスカレーターの前に到着しかかるという事態と主節であらわされる自問するという事態とは同時性の関係にあり、意味的な対立関係をあらわしているとは考えにくい。ここでも *alors que* 節は、主節の事態が生起する場面を設定していると解釈するのが妥当であるように思われる。

(13) Providence se faufila dans la foule et prit le chemin de la sortie. Elle avait l'impression qu'il lui faudrait encore marcher des kilomètres pour sortir de ce terminal oppressant. Sans doute parce qu'elle devait slalomer en permanence entre tout ce monde, ce qui la ralentissait beaucoup, sans compter qu'il y avait plusieurs minutes déjà qu'elle marchait sur un tapis roulant en sens contraire...
Alors qu'elle arrivait devant l'escalator qui menait aux portes de la navette Orlyval, elle se demanda si elle ne devait pas attendre d'être sûre que son vol était annulé pour quitter l'aéroport.

⁶ (11)の例においては、主節の動詞が単に直説法現在形であるということではなく、*ne～plus*（かつては～だったが、もはや現在は～ない）という、過去の状態に関する前提を伴うアスペクト表現とともに用いられている点を考え合わせることに留意すべきであろう。

(Romain Puértolas, *La petite fille qui avait avalé un nuage grand comme la tour Eiffel*)

(14)も同様の例として解釈することができる。

(14) Alors que la voiture quittait la ville et parcourait la campagne, Alice regarda défiler les pâturages et se demanda si elle n'aurait pas préféré rester sur le plancher des vaches, quitte à ce que le voyage dure plus longtemps.

(Marc Levy, *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*)

談話解釈の観点からは、同じ時況節でも主節に対して前置されるか後置されるかによっても果たされる機能は異なる点に着目する必要がある。本節で取りあげた *alors que* 節が同時性をあらわすと考えられる例は *alors que* 節が主節に対して前置されている。Riegel et al. (2016)は、主節に対して前置された時況節は主節によってあらわされる事態が位置づけられる枠組みを提供すると述べている⁷。

もつとも、*alors que* 節が後置される場合でも、特段の意味的対立関係が認められず、前置される主節との同時性をあらわすと解釈されることがある。

(15) Il se pencha par la fenêtre pour contempler le ciel en renversant la tête et Lola Baratier future madame Milan sentit le sol devenir étrangement mou et traître alors que des papillons se réveillaient dans un très lointain recoin de son estomac.

(Angélique Barbérat, *Bertrand et Lola*)

さらに、主節で用いられる動詞の時制形式は直説法単純過去形や直説法複合過去形とはかぎらず、次の(16)や(17)のように直説法大過去形であっても *alors que* 節が同時性をあらわすために用いられていると解釈できる例がある。

(16) Ce fumier avait redémarré la machine alors que les derniers cris de Giuseppe résonnaient encore dans le hanger.

(J.P. Didierlaurent, *Le lecteur du 6h27*)

(17) En outre, la direction avait convenu que, peut-être, le dénommé Garminetti, ex-opérateur en chef de la Zerstor 500, avait été victime d'un incident regrettable ayant entraîné la reprise soudaine de l'activité alors qu'il se trouvait malencontreusement dans la fosse à ce moment-là.

(J.P. Didierlaurent, *Le lecteur du 6h27*)

⁷ ここでは原文の *propos* に対して「主題」という訳語を充てている。

これらの例から明らかなように、実際には **alors que** 節が主節であらわされる事態との対立関係をあらわすと解釈するのは難しい場合がある。したがって、**alors que** 節が対立関係をあらわすというのは、**alors que** 節と主節においてそれぞれ用いられる動詞の時制形式の組み合わせが、対立関係を読み込むのにふさわしい場合において顕著にあらわれる意味的特徴であると考えるのが妥当ではないかと考えられる。

4. 事態認識と時制形式および構文の選択

前節では、談話解釈上 **alors que** 節が持つ意味的特徴としての同時性と対立関係のどちらがあらわれるか、という問題には、**alors que** 節および主節で用いられる動詞の時制形式が関与している可能性があることを指摘した。

このことは、我々の事態認識と時制形式の組み合わせ、および時況節の機能との間に相関関係があることを示唆している。時制形式のはたらきを考えるとき、個々の時制形式の用例を単独の形で考察するだけではかならずしも見えてこないことであるが、複数の時制形式が連続して用いられるとき、どのような構文においてどのような組み合わせでそれらが用いられているかということは、我々が一連の事態をどのような関係づけのもとで解釈しているか、という認知的操作の結果としてあらわれるものであり、ある特定の時制形式や構文の選択には、そのような意味での我々の事態把握のあり方が反映されているのである⁸。

このことをさまざまな時況節を対象として具体的に論じるためには、認知言語学的な考察が有効であると考えられるが、そのような観点からの考察は本稿の枠組みを大きく超えることになるため、稿をあらためて論じることとしたい。

5. 談話解釈における **alors que** 節の機能

最後に、談話解釈の観点から **alors que** 節が果たす機能について考察する。そのために、筆者がこれまでに **quand** 節の機能に関して提示した主張を確認しておきたい。高橋(2016)では、**quand** 節の機能について次のように述べた。

quand 節の機能

quand 節の機能は、主節の事態が生起したのがいつであるかを示すために場面の設定を行うことにある。そのためには、**quand** 節において用いられる時制の解釈が主節とは独立した形で得られる必要がある。

3 節で具体例を分析した際に論じたように、**alors que** 節の解釈には常に対立の意味が伴うとはかぎらないため、**alors que** 節の談話解釈上の機能として対立の意味関係を組み込む

⁸ ここでは「構文」という語は、それぞれの時況節が、主節に対して前置される場合と後置される場合をそれぞれ区別して扱うために用いられている。

ことには問題があると考えられる。また、*alors que* 節の解釈において主節との同時性が常に成立するわけではないことも考慮する必要がある。このような意味において、*alors que* 節が談話解釈上 *quand* 節とも *comme* 節とも異なる機能を持っていることは明らかである。

このことをふまえ、談話解釈の観点から *alors que* 節の機能を説明すると、次のようになると考えられる。

***alors que* 節の機能**

alors que 節の機能は、談話解釈上、当該の事態を主節の事態と関連づけることにある。

どのような形で関連づけられるかについては、*alors que* 節と主節のそれぞれにおいて用いられる時制形式の解釈機序によって、同時性の関係となる場合もあれば、対立・譲歩の関係となる場合もある。

なお、高橋(2021)では、直説法半過去形が、主節との同時性をあらわす時況節と考えられている *quand* 節および *comme* 節の中で用いられる場合の解釈の違いについて次のように述べた。

***quand* 節および *comme* 節の中で半過去が用いられる場合の解釈の違い**

quand 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要がある、必然的に *quand* 節中の半過去の使用は限定的なものとなる。その一方で *comme* 節において半過去を用いる場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため、半過去の使用は特に問題とならない。

ここに同時性をあらわす *alors que* 節において直説法半過去形が用いられる場合をくわえると、次のような形になる⁹。

⁹ 石野(2014)は、次のように *alors que* 節が独立節として用いられている例の存在を指摘しており、*alors que* 節の解釈が主節と独立してなされる場合があることが示唆されるが、このような例の談話解釈上の機序については、稿をあらためて論じることとしたい。

Les hommes croient que les machines travaillent pour eux. *Alors que* ce sont eux, désormais, qui travaillent pour elles.
(Robbe-Grillet, in 石野 (2014))

quand 節,comme 節および alors que 節の中で半過去が用いられる場合の解釈の違い
quand 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには
談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要がある、必然的に quand 節中で
の半過去の使用は限定的なものとなる。その一方で comme 節において半過去を用いる
場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため、
半過去の使用は特に問題とならない。alors que 節において半過去を用いる場合にも、
alors que 節と主節が関連づけられて解釈されるため、主節で単純過去や複合過去、ある
いは大過去のような自立的な時制形式が用いられる場合には、alors que 節における半過
去の使用に対して特段の制約は存在しない。

ここで本稿における alors que 節についての考察を筆者のこれまでの主張と重ねることで、
主節との同時性をあらわす時況節と考えられる quand 節, comme 節, alors que 節それぞれの
のちがいを明らかにするためには、談話解釈上の機能という観点からそれぞれの時況節の
機能を考察する必要があることがより明確になったと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、対立関係のニュアンスを伴い時間的同時性をあらわす時況節であると説明さ
れる alors que 節の談話解釈上の機能について、文学作品からの複数の引用例の分析をもと
に考察した。

本稿での考察により、主節と alors que 節で用いられる時制形式の組み合わせによっては
alors que 節の解釈において主節との同時性が常に成立するわけではないものの、alors que 節
の解釈には常に対立の意味が伴うとはかぎらないこと、また alors que 節の談話解釈上の機
能を統一的な形で説明するためには、我々の事態認識とその言語化に関する認知言語学的
な考察が有効であることが確認された。

本稿では、他の時況節と比較したうえで alors que 節の談話解釈上の機能についてじゅう
ぶん説得的な説明を与えるには至らず、いくつかの実例の分析をつうじて、alors que 節の
特徴を記述する段階にとどまった。今後は、作例等の検証も行いながら、談話解釈上 alors
que 節が担う機能が quand 節や comme 節, pendant que 節などの機能とどのようにちがうの
かということを、より包括的かつ精密に論じることを目指したい。

その際、とくに談話解釈の観点からは、次のような用例の分析も必要となることが考え
られる。高橋(2022)でも指摘したように、同一文中で alors que 節が他の時況節と併用され
ることがあるが、このような事例について談話解釈の観点から詳しく考察した先行研究は
ほとんど見受けられない。

- (18) Quand il entra dans le bistro avec d'infinies précautions et une moue d'huissier, alors que
nous peignons de rouge et de vert de très fons bouchons de balsa sculptés tout exprès pour

l'ablette, je compris que c'en était fini pour moi d'un grand pan de douceur.

(Philippe Claudel, *Le Café de l'Excelsior*)

このような例を分析するには、同時性をあらわす時況節がそれぞれ談話解釈上、異なるしくみで事態を定位することを想定し、それらの階層関係を明らかにするための考察が必要とされる。

さらに、2 節で確かめたように、*alors que* 節は *tandis que* 節と同様のはたらきを持つと説明されるのが一般的であるが、このことについても、今後さらに具体的な用例の考察を行い、両者に談話解釈上の機能のちがいはないのかという点について検証する必要がある。

今後はこれらの問題についてさまざまな用例を詳細に分析したうえで考察を重ね、われわれ人間が複数の事態を認識し、それらを言語化するしくみについてさらに理解を深めることを目指したい。

参考文献

- Y. Delatour et al. (2004) *Nouvelle Grammaire du Français*, Hachette.
- Martin Riegel et al. (2016) *Grammaire méthodique du français*, 6^e édition, Presses Universitaires de France.
- 石野好一 (2014) 「フランス語接続詞の意味とニュアンス」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第 15 号, 23-44.
- 曾我祐典 (2011) 『中級フランス語 つたえる文法』白水社.
- 高橋克欣 (2016) 『「こと」の認識「とき」の表現 – フランス語の *quand* 節と半過去』京都大学学術出版会.
- 高橋克欣 (2021) 「談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム – 談話的時制解釈の観点からの分析」『時空と認知の言語学 X』言語文化共同研究プロジェクト, 11-19.
- 高橋克欣 (2022) 「時況節の位置と談話解釈上の機能 - *quand* 節と *comme* 節の分析」『時空と認知の言語学 XI』言語文化共同研究プロジェクト, 11-18.
- 渡邊修吾 (2015) 「*C'est alors qu'apparut le renard* : 場面の転換を表す分裂文」『フランス語学研究』第 49 号, 87-107.

『デュランデ城』におけるダイクシス（その１）

―版によって her-と hin-が入れ替わる事例を中心に―

瀧田恵巳

1. はじめに

Alewyn(1957/1974)によると、Eichendorff の作品においては Hier「ここ」の導入手段として her-と hin-が風景描写に多用され、また her-の方が hin-よりも頻繁に用いられる。この見解を受け、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)では、Jahn(1937)と Ehlich(1985)の学説を紹介し、Ehlich(1985)が扱った『デュランデ城 Das Schloss Dürande』を取り上げ、その her-と hin-の用例を風景描写とそれ以外に分けて割合を算出した。さらに Alewyn(1957/1974)の Hier「ここ」を場面の中心を占める知覚主体（登場人物）と設定したうえで Hier/Origo と呼び、これが her-の示す方向の目標及び hin-の示す方向の起点を占めるかどうかについて検討した。

その結果、her-と hin-の全用例における風景描写の割合は、her-が総数 28 例中 6 例で 21.4%、hin-が総数 39 例中 2 例で 5.1%に過ぎない（瀧田 2021 : 25 [表 2]）ことが明らかになった。この割合からいえば風景描写は her-と hin-のプロトタイプの用法と判断するのは難しい。また風景描写の用例数に関しては、her-の方が hin-よりも多いという点で her-の方が多用されるという Alewyn(1957/1974)の指摘は妥当といえる反面、これらの用例は herauf と herüber と hinein に限定されるため、-auf と -über に関しては確かに her-の方が優勢ではあるが、-ein に関しては hin-の方が優勢である（瀧田 2021:25[表 2]）。

風景描写における Hier/Origo の導入に関しては、her-が示す方向の目標側に Hier/Origo が導入される用例数は 66.7%という比較的高い割合を占めるが、hin-の示す方向の起点側に導入される用例数の割合は 0.0%である（瀧田 2021:25 [表 3]）。この分析により、風景描写の herauf と herüber の用例については、方向の目標側に存在する知覚主体が遠くからの音響や光の運行を受け止めるような描写がなされる傾向が強いが、hinein の示す方向には、起点側の知覚主体から離れていくという遠近効果は薄いということが示された。

以上のように瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)の分析結果によると、Alewyn(1957/1974)の指摘する風景描写における her-の特徴は認められる一方、hin-の特徴は認められない。

なお風景描写以外の用例については、her-の示す目標側に Hier/Origo が認められる割合は 54.5%、hin-の示す方向の起点側に Hier/Origo を位置づけられる例の割合は 59.5%であった（瀧田 2021 : 26 [表 4]）。これを風景描写の割合（her- : 66.7%、hin- : 0.0%）と比較すると her-はやや少ないが、hin-に関してははるかに高い割合を占めている。また herunter と herauf と hinüber に関しては、最も高い割合（100.0%）を占めている。このように風景描写以外の用例においては her-の表す方向の目標側及び hin-の表す方向の起点側に Hier/Origo が位置づけられる用例数の割合は比較的高いと言えるものの、その反例はそれぞれ全体の 40%

以上を占めている。

こうした方向の目標側及び起点側への Hier/Origo の導入に関する 40%以上の反例のうち、明らかに her-の示す方向の目標側に Hier/Origo の導入が認められない事例は heraus と herein において顕著に見られた。その中でも次の herein の例は特に際立っている。

- (1) Da ließen sich auf einmal unten Stimmen vernehmen, drauf hörte man jemand eilig die Treppe heraufkommen, immer lauter und näher. „Ich muss herein!“ rief es endlich an der Saaltür, [...]. (SD:32)

そのとき突然、階下で人声がしたと思うと、誰かが急いで階段を駆け上がってきた。足音はしだいに大きく近づいてきて、とうとう広間の扉のところで「入れてくれ!」という叫び声がした。(省略) (208) (瀧田 2019 : 28)

これは部屋の外にいる話し手が室内にいる相手に呼びかける会話文で、Hier/Origo の導入先として最も典型的な知覚主体であるはずの話し手は起点側に位置する。この場合話し手は内部空間側にいる相手の立場をとっているとも考えられる。しかし次の例(2a)では、内部空間に出来事を体験する人物がいないにも関わらず、herein が使用されている。

- (2a) In der schönen Provence liegt ein Tal zwischen waldigen Bergen, die Trümmer des alten Schlosses Dürande sehen über die Wipfel in die Einsamkeit herein; von der andern Seite erblickt man weit unten die Türme der Stadt Marseille; wenn die Luft von Mittag kommt, klingen bei klarem Wetter die Glocken herüber, sonst hört man nichts von der Welt. (SD:3)

美しいプロヴァンス地方の緑ふかい山々にかこまれて、ひっそりとした谷間がある。そこからふり仰ぐと、木々の梢をこえた高みに、デュランデ古城の廃墟がじつとこちらを見下ろしており、目を転じてはるか下方を見晴らせば、遠くにマルセイユの町の尖塔がかすんでいる。澄みきった日には、南風にのって鐘の音がひびいてくることもあるが、そのほかには、世間の物音は何一つここに届くことはない。(176) (瀧田 2019 :28)

この事例は物語冒頭部分で、herein は擬人化された「(デュランデ古城の) 廃墟 Trümmer」が「寂寥 Einsamkeit」の中を見る方向を表す。それ以外に登場人物と呼べる存在はこの時点でまだ出現していないため、方向の目標側に Hier/Origo は存在しえない。

方向の目標側への Hier/Origo の導入が認められない heraus の事例としては、話し手や中心的な登場人物の見る動作や、発言行為、譲渡行為の例が挙げられる。これらにおいては全て、場面の中心を担う知覚主体である Hier/Origo が動作方向の起点側に位置する (瀧田 2019 :25-26)。次の例(3a)は、登場人物レナーテ Renate とガブリエレ Gabriele による会話の一部である。二人はある夜更け、庵室の明け放った窓辺に腰かけており、そこから修道院

の庭園やはらかに広がる田園を見渡している。話し手レナーテは聞き手ガブリエレと共に屋内にいるにもかかわらず、ここでは *heraus* が用いられている。

(3a) „Wie du auch so allein im Dunkeln durch den Wald gehen kannst“, sagte Renate wieder; „ich stürbe vor Furcht. Wenn ich so manchmal durch die Scheiben heraus sehe in die tiefe Nacht, dann ist mir immer so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes.“ (SD:10-11)

「あなたなら、こんな暗闇のなかを、ひとりぼっちで、森をぬけて行けるでしょうけれど」とレナーテは言った。「私なら恐ろしくて死んでしまうわ。窓ガラスごしに深い夜の闇をながめるとね、私はずっと、この庵室のなかにいることが、マリアさまのマントにくるまれているように、とてもありがたく、心強く感じられるのよ」(184-185)
(瀧田 2019 :26)

このように瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)によると、*her-*は風景描写であるか否かに関わらず目標側への *Hier/Origo* が導入される傾向が高いものの、その反例はあり、中でも特に *herein* と *heraus* には顕著に見られる。

この点に関連してさらに特筆すべき事実がある。瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)で扱った Reclam 版の『デュランデ城』の例文のうち、ここで再掲した *herein* の例(2a)と *heraus* の例(3a)と同じコンテキストで、Manesse 版では次のように *hinein* と *hinaus* が用いられている。つまり *her-*と *hin-*が入れ替わっているのである。

(2b) In der schönen Provence liegt ein Tal zwischen waldigen Bergen, die Trümmer des alten Schlosses Dürande sehen über die Wipfel in die Einsamkeit hinein; von der andern Seite erblickt man weit unten die Türme der Stadt Marseille; wenn die Luft von Mittag kommt, klingen bei klarem Wetter die Glocken herüber, sonst hört man nichts von der Welt. (SDM:271)

(3b) „Wie du auch so allein im Dunkeln durch den Wald gehen kannst“, sagte Renate wieder; „ich stürbe vor Furcht. Wenn ich so manchmal durch die Scheiben hinaus sehe in die tiefe Nacht, dann ist mir immer so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes.“ (SDM:282)

このように版によって *her-*と *hin-*が入れ替わる事例にはどのような相違があるのだろうか。またこれは *herein* と *heraus* における方向の目標側へ *Hier/Origo* の導入に対する反例の多さにも関連するのだろうか。

さらにこれらの用例の顕著な特徴として、*sehen* の自動詞用法との結合が挙げられる。

つまりこれらの文は情景描写にも深くかかわると考えられる。特に *herein* と *hinein* のバリエーションに関しては、それぞれ Ehlich(1985)と Lindemann(1980)による情景描写に関わる分析が存在し、単独でもすでに一つの課題として注目されていることがわかる。

以上のことから、本論文では2で *herein* と *hinein* のバリエーションに関する先行研究を紹介し、3で *herein* と *hinein* 及び *heraus* と *hinaus* のバリエーションを他の用例や用法に関連づけて分析し考察する。最後に4でまとめと今後の課題を提示する。

2. *herein* と *hinein* のバリエーションに関する先行研究

2.1. Ehlich(1985)による *herein* の解説

例(2a)の *herein* について Ehlich(1985:253)は次のように解説している。

- (4) Die Trümmer »sehen herein«; indem Eichendorff so schreibt, gibt er dem Leser einen Platz in der Geschichte, sein Hier: die Origo des Lesers ist die Einsamkeit. (Ehlich 1985:253)

上記の解説によると、「廃墟 Trümmer」が「こちらの内部空間の中を見る *sehen herein*」という Eichendorff の描写により、読者は物語中の居場所を与えられ、それが読者の「ここ」即ち「読者の Origo (die Origo des Lesers)」となる。読者の Origo を寂寥とする解釈は、先述の例(2a)に示されるように、*herein* の目標となる内部空間が先行する前置詞句 *in die Einsamkeit* の「寂寥 Einsamkeit」であることに基づく。

Ehlich(1985)の提唱する読者の Origo は、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)が設定した物語場面の中心人物に導入される Hier/Origo とは明らかに性質を異にする。Ehlich(1985)の解説に基づくならば、読者の Origo が置かれる内部空間としての寂寥は、その直前の文の「緑深き山々に囲まれた谷 *ein Tal zwischen waldigen Bergen*」という空間の状態であることが容易に連想される。しかし物語の冒頭で未だ登場人物は現れていないため、ここには物語場面の中心を担う知覚主体としての Hier/Origo を導入することは出来ない。Ehlich(1985)が読者の Origo を設定する要因もこの点にあると考えられる。

Ehlich(1985)自身は言及していないが、「谷」に Origo が置かれるという見解は、後続の文脈からみても整合性がある。以下の例(5)は(2a)に続く文章である。

- (5) In diesem Tale standen ehemals ein kleines Jägerhaus, man sah's vor Blüten kaum, so überwaldet war's und weinumrankt bis an das Hirschgeweih über dem Eingang; in stillen Nächten, wenn der Mond hell schien, kam das Wild oft weidend, bis auf die Waldeswiese vor der Tür. Dort wohnte dazumal der Jäger Renald, im Dienst des alten Grafen Dürande, mit seiner jungen Schwester Gabriele ganz allein, denn Vater und Mutter waren lange gestorben. (SD:3)

この谷間に、以前、一軒の獵師小屋があった。咲き匂う花々で家が埋もれてしまうほど、

あたりには鬱蒼と木が繁り、葡萄の蔓は戸口に欠けた鹿の角にまでからみついていた。月の明るい静かな夜には、よく、森の獣が草をはみつつ、家の前の草地にまで出かけてくるのだった。この家に、当時デュランデ老伯爵に使える猟師レナルトと妹ガブリエレが住んでいた。父親も母親もはやくなくなったので、彼らは全く二人きりの兄弟だったのである。

(176)

「この谷間に in diesem Tal」とあるように、(2a)の直後「谷間」は *dieser* によって指示されている。Diewald(1991:227f.) が指摘するように *dieser* は *Origo* を含有する。この点で「谷間」に置かれる「読者の *Origo*」はその後の文脈に合致している。さらにその後、かつて谷にあった「一軒の猟師小屋 ein kleines Jägerhaus」を通して、当時そこに住んでいた猟師「レナルト Renald」とその妹「ガブリエレ Gabriele」が登場する。この二人の登場人物はこの物語の中心人物となる。

このように *herein* により「寂寥」を通じて谷へと誘われる「読者の *Origo*」が想定されるならば、物語場面の中心は文脈上ごく自然に中心人物 (*Hier/Origo*) に移行する。

2.2. Lindemann (1980)による hinein の解説

例(2b)の *hinein* に関して、Lindemann (1980)は次のように解説する。

(6) Wir finden eine der bei Eichendorff immer wiederkehrenden Landschaften, in denen trotz einer Fülle von Raum- und Zeitdeiktika gerade der Raum merkwürdig unbestimmt ist. [...] Weiter läßt sich zwar noch festhalten, daß „ein Thal zwischen waldigen Bergen“ liegt, die Raumbestimmung: „von der andern Seite“ in Hinblick auf die Stadt Marseille ist aber wieder nur auf die Ruine des Schlosses bezogen, und dessen Position in Relation zu dem Tal wird wiederum nur sehr ungenau bestimmt, wenn es heißt: „die Trümmer ... sehen über die Wipfel (!) in die Einsamkeit hinein.“ (Lindemann 1980:61)

Lindemann (1980:61)によると、冒頭の風景描写における空間的・時間的なダイクシス表現の多用にもかかわらず、奇妙なことに空間そのものが定まらない。「谷が緑深い山々に (囲まれている) ein Thal zwischen waldigen Bergen」という部分に関しては、確かに位置は確定しているが、マルセイユの町を見る「別の側から von der andern Seite」という表現が関連づけられるのは、城の廃墟しかない。これを「廃墟が梢越しに孤独をのぞき込んでいる die Trümmer ... sehen über die Wipfel (!) in die Einsamkeit hinein」という先行文脈と考え合わせると谷との関係はさらに非常に不明確になると主張する。

この Lindemann (1980)の混乱の原因は、おそらく冒頭の *hinein* により風景描写の視座を「廃墟 die Trümmer」におく解釈をしたためであろう。まず(2b)の「別の側から von der

andern Seite」の「別の側」とは文脈上マルセイユの側であることは確定している。ではこのマルセイユは何を基準とし何と対立した「別の側」なのだろうか。Ehlich(1985)の解釈による *herein* の事例では、マルセイユは読者の *Origo* が置かれる「谷間」を基準として「廃墟」に対立する「別の側」に位置づけられる。つまりマルセイユと対立するのは「廃墟」である。それに対して *hinein* の事例において描写の視座を「廃墟」に置くとすれば、「谷間」は見られる対象となり、これがマルセイユと対峙する。そしてマルセイユから響いてくる鐘の音は「廃墟」から描写される。その後描写は再び「谷間」に移され、(5)の「この谷間には *In diesem Tale*」のように *dieser* で指示される。視座が置かれているはずの「廃墟」でも、これまで描写されてきたマルセイユでもなく、マルセイユに対立する「谷間」を、再び持ち出し *dieser* で指示することは文脈上非常に不自然である。「谷間」をトピックとして扱うのであれば、初めから描写の視座とすべきであるし、先行文脈のマルセイユの描写は廃墟を介したものであるために、トピックであるはずの谷間の表象にとって非常に関連の薄い希薄なものとなり、全体として統合性に欠けるコンテキストとなる。それに対して、Ehlich(1985)による(2a)の *herein* の解釈では、読者の *Origo* が「谷間」に設定され、「廃墟」とマルセイユは谷間から眺められる対象として「谷間」の表象に統合される。

2.3. 先行研究から得られる知見

ここで紹介した先行研究において *her-*の目標側及び *hin-*の起点側には、読者の *Origo* と描写の視座が想定されている。これらは読者（物語場面を受けるという点で厳密に言えば「聴き手」と語り手に由来するものであり、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)で仮定した物語内の登場人物による中心点 *Hier/Origo* とは次元を異にする概念である。

3. 分析と考察

3.1. *herein* と *hinein*

2 で述べたように Ehlich(1985)は(2a)の *herein* を文脈上問題視しないのに対して、Lindemann(1980)は(2b)の *hinein* により空間がさらに不明確になると指摘する。したがってこの文脈では *hinein* よりも *herein* の方が自然なものと判断されていることがわかる。

それではなぜ *hinein* というバリエーションが存在しえるのだろうか。

第一の要因として、*hinein* が目標と結合する傾向が強いという点が挙げられる。瀧田(2021:21-24)は Reclam 版の *hinein* の用例全 9 例を挙げているが、そのうち 7 例では、例(7)のように *hinein* は *in* の目標を表す 4 格支配の前置詞句と共起している。残り 2 例においては、例(8)のように、*hinein* は先行文脈の内的空間へ方向（例(8)では「レナルトの家」へ方向）を示している。

(7) Er ging nun an prächtigen Landhäusern vorüber durch die langen Vorstädte immer tiefer in das wachsende Getöse hinein, [...] (SD:19)

彼は郊外の幾多の壮麗な別荘を通りすぎ、高まりゆく轟音にますます近づいていった。
(省略) (194)

- (8) „Was macht Ihr hier in Renalds Haus?“ sagte er. „Ich bin müde, ich will hinein.“ (SD:29-30)
「おまえはレナルトの家で何をしている？俺は疲れている。入って休みたいのだ」 (206)

例(2b)においても例(7)と同様に、**in die Einsamkeit** という目標を表す **in** 前置詞句が先行している。こうした目標と結びつくことから **hinein** が選出されたと推定される。

なお目標と結合する傾向は、**hinein** の非空間的用法においても指摘することができる。瀧田(2008)によると、「だます、だまされる」、「不快な状況に陥る、陥れる」といった意味においては **herein** と **hinein** はどちらも用いられる一方、目標を表す 4 格支配の **in** 前置詞句と共起する「自分の中に取り込む」、「ありもしない意味を捏造して勝手に読み込む」、「口出しする」と表現には **hinein** しか用いられない。

第二の要因は結合する動詞 **sehen** にあると考えられる。例(2a)のように **herein** と共に用いられる場合は、見る存在であるはずの「廃墟」が「谷間」から見られる存在となる。つまりここに視座の分裂が生じる。それに対して例(2b)の **hinein** の場合には風景描写の視座は「廃墟」側に置かれるため、視座の分裂は起こらない。

以上のように、**hinein** を選択する要因として、目標との結合と視座分裂の回避が考えられる。

一方、文脈上自然なものとして受け入れられる **herein** には視座の分裂が認められるが、その要因は **sehen** の用法そのものにあると考えられる。自動詞用法の **sehen** には例(9)のように「(ものが) 見えている」現象を表す場合と例(10)のように「見る」という知覚行為を表す場合がある。前者の主語は見られる対象であり、後者は見る行為の動作主である。

(9) Nur die höchsten Gebäude, Berggipfel sahen aus dem Nebel. (BW:713)

(10) Man soll nicht in die Sonne sehen. (BW:712)

例(2a)の **herein** の事例において **sehen** の主語である廃墟は例(10)のように擬人的に知覚行為の主体となるとともに、**herein** という方向表現により風景描写の視座から見られる対象でもあることから例(9)の要素も併せ持っている。この **herein** の事例のように見る動作主が同時に見られる対象となる事例は、逆に言えば自分が見ているはずの対象が実はこちらを見ていることになるが、こうした事実や認識は随所に見いだすことができる。例えば自動車のヘッドライトで照らされるとき、自分はライトを見るとともに自分の姿も見られていると察知するであろうし、見上げた月や星にこちらを見下ろす顔をイメージすることもできる。

さらに **herein** には空間関係に基づく傾向も認められる。先述の例(1)では **Hier/Origo** を担うはずの話し手が起点側に位置しているが、目標となる内部空間にはこの物語の中心的

人物である伯爵が聞き手として存在する。つまりこの事例は、内部空間にいる聞き手に視座を置いたものと解釈することもできる。こうした例から考えると、**herein** は、特に聞き手など視座が置かれやすい存在が目標の内部空間に存在する状況で用いられ、**Hier/Origo** と対立する視座を有する傾向があるといえる。こうした聞き手の視座は、Ehlich(1985)の提唱する「読者の **Origo**」と、伝達の受け手によるという点で一致する。

3.2. **heraus** と **hinaus**

例(3a)の **heraus** と例(3b)の **hinaus** もまた、**herein** と **hinein** の事例と同様、動詞 **sehen** と共起する。この場面は話し手レナーテが窓の外を見る動作である点では、例(3b)のように **Hier/Origo** から離れる方向を指す **hinaus** を用いる方が適切である。事実、先行文脈でレナーテが単に庵室の外を眺める場面では、Reclam 版でも **hinaus** が用いられている。

(11) Die Heimchen zirpten unten auf den frischgemähten Wiesen, überm Walde blitzte es manchmal aus weiter Ferne. „Da lässt mein Liebster mich grüßen“, dachte Gabriele bei sich. – Aber Renate blickte verwundert hinaus; sie war lange nicht wach gewesen um diese Zeit. (SD:10)

刈り取られたばかりの下の草地では蟋蟀が鳴き、森の上空にはいくたびか遠い稲妻が走った。あれはあの人が私に送ってくれる挨拶なんだわ、とガブリエレはひとり思うのだった。一だがこの時刻に起きていることの久しくなかったレナーテは、驚いて外をながめながら言った。(184)

しかし例(3a)のように **heraus** を用いると、**herein** の例(2a)と同様に視座を分裂させ、庵室内の **Hier/Origo** と対立する庵室外の視座を想定することができる。話し手レナーテは確かに自分が窓の外を見る動作に **heraus** を用いているが、それはその後庵室の中にいる自分自身の描写につながる。「マリアさまのマントにくるまれているように、とてもありがたく、心強く感じられる *so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes*」という後続の描写は、聖母のマントに包まれたように心強く感じる自分自身を明らかに庵室の外の立場から想像する内容である。

以上のように、動詞 **sehen** と **Hier/Origo** との関係に基づくことにより、(3b)の **hinaus** については **Hier/Origo** の側に視座が置かれ、(3a)の **heraus** については **Hier/Origo** と対立する視座が目標側に置かれると説明することができる。

このように **heraus** に関しても **herein** と同様に描写の視座が **Hier/Origo** と対立するという解釈が成り立つ。そしてまた **heraus** にも **herein** の例(1)と同様に **Hier/Origo** が起点側に位置する例が見られる。例(12)の **heraussagen** は発言行為を表し、**Hier/Origo** に相当するレナルトは発言行為の行為者としてその行為の方向の起点側に位置する。例(13)の **herausgeben** は譲渡を表すが、**Hier/Origo** を担う話し手は行為者として起点側に位置する。

発話行為も譲渡もそれぞれ目標側に聞き手と譲渡する相手という受け手を必要とする行為であり、視座を受け手側に置くという解釈が成立する。

(12) Renald bat nun ehrerbietig um kurzen Urlaub zu einer Reise nach Paris. Auf die Frage des Grafen, was er dort wolle, entgegnete er verwirrt: Seine Schwester sei dort bei einem weitläufigen Verwandten – er schämte sich herauszusagen, was er dachte. (SD:18-19)

レナルトはうやうやしく、巴里へ行くための休暇を願い出た。何をしに行くのかと問われると、彼は狼狽して答えた。「妹が当地の遠い親戚の家に滞在しておるのでございます」―彼は自分の考えを口にすることを恥じたのである。(194)

(13) Und rasch zu Renald gewandt, rief er: „Und wenn ich deine ganze Sippschaft hätt’, ich gäb’ sie nicht heraus! [...]“ (SD:24)

そしてさっとレナルトの方を向くと叫んだ。「もし仮におまえの一族を全部ここに隠していたとしても、俺はわたさぬぞ! (省略)」(199)

4. まとめと今後の課題

本論文では、同じ文脈に見られる *herein* と *hinein* 及び *heraus* と *hinaus* のバリエーションについて、その相違と成立要因について検討した。これらはいずれも動詞 *sehen* との結合においてみられる現象であるという点から、特に *her*-において *sehen* の動作主である起点側の *Hier/Origo* と「読者の *Origo*」や描写の観点という目標側に位置する視座との分裂を指摘するに至った。さらに視座の分裂は *herein* と *heraus* の他の用法にも認められ、特に受け手が目標領域を占める傾向も認められた。ただし視座の不一致は *hin*-においても想定される。廃墟が谷を見下ろす *hinein* の視線も、レナーテが庵室の窓から外を見る *hinaus* の視線も起点となる知覚主体が占める *Hier/Origo* とそれを描写する観点との間には絶妙なズレがある。つまり「話者への方向」及び「話者から離れる方向」という *her* と *hin* の原義における「話者」とは、場面の中心である *Hier/Origo* とは別の、場面からも解放された描写の視座、いわば視点である。ただし *hin* の「離れる方向」という意味記述に関しては、一つ留保すべき点がある。それは既に瀧田(2021)において指摘した用例のうち、場面の中心である *Hier/Origo* の移動を伴う登場人物の移動の方向を表す用例に現れており、必ずしも移動による遠近方向を表すとは言えない。今後はこうした事例について検討する。

参考文献

Alewyn, Richard (1957/1974): Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: *Probleme und Gestalten: Essays*, Frankfurt am Main: Insel, pp. 203-231. (Erstdruck: *Euphorion* 51, 1957, pp. 42-60.) (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984年, 303-340.)

- Bühler, Karl (1934/1982):** *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Stuttgart, New York: Fischer, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス, 1983.)
- Diewald, Gabriele Maria (1991):** *Deixis und Textsorten im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Ehlich, Konrad (1985):** Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff. In : Schweizer, Harro (Hg.): *Sprache und Raum*, Stuttgart: Metzler, pp. 246-261.
- Jahn, Gisela(1937) :** *Studien zu Eichendorffs Prosastil*. Leipzig: Mayer & Müller.
- Lindemann, Klaus(1980):** *Eichendorffs Schloß Dürande*. Paderborn, München, Wien, Zürich: Schöningh Verlag.
- 瀧田恵巳(2008) :**「入る方向表現による非空間的意味と内外関係について ―現代ドイツ語 herein/hinein の分析と試論―」『言語文化研究』第 34 号 pp. 19-39. 大阪大学言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2018b):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 1)」『言語文化共同研究プロジェクト 2017・時空と認知の言語学Ⅶ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2019):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 2)」『言語文化共同研究プロジェクト 2018・時空と認知の言語学Ⅷ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2020):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 3)」『言語文化共同研究プロジェクト 2019・時空と認知の言語学Ⅸ』 pp. 1-10. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2021):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 4)」『言語文化共同研究プロジェクト 2020・時空と認知の言語学Ⅹ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科

例文出典

- Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden: Bd.3*. hrsg. v. Krämmer, Hilderad; Zimmermann, Harald, Anstalt, Stuttgart:F. A. Brockhaus Wiesbaden Verlags, 1981. [略号 BW]
- Eichendorff, Joseph von : *Das Schloss Dürande*. Stuttgart: Philipp Reclam jun. , 2011. [略号 SD]
- Eichendorff, Josef von: *Das Schloß Dürande*. In: Bergengruen, Werner (Hrsg.) *Erzählungen/ Josef Freiherr von Eichendorff*, Zürich: Manesse, 1988, pp.269-334. [略号 SDM]
- アイヒェンドルフ, ヨーゼフ・フォン (渡辺洋子訳) :「デュランデ城」 前田道介編『アイヒェンドルフ (ドイツ・ロマン派全集第六巻)』国書刊行会, 1983, 175-228.

現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現について

—couleur を中心に—

春木仁孝

1. はじめに

筆者は春木(2016)において、*côté*, *niveau*, *question*, *genre*, *façon*, *style* などある種の名詞が前置詞的あるいは副詞的な機能語へと文法化している現象について考察した。これらの表現は、それぞれに異なる点もあるものの、最も単純な場合は *côté look* 「見かけに関しては」や *niveau transport* 「輸送に関しては」、*façon James Bond* 「ジェームズ・ボンドばりの」のように名詞＋名詞という構造を取り、前置された名詞が前置詞的な機能を持つようになった。*genre*, *style* などには文を導入するような用法もあるが、これらも出発点は名詞＋名詞（句）という構造であると思われる¹。

さて *côté*, *niveau*, *question* などが機能的な表現として名詞を従える形式は 20 世紀後半に大きく発展するが、それと並行して *emballage cadeau* 「プレゼント用包装」、*assurance maladie* 「疾病保険」のように後置された名詞が先行の名詞を修飾・限定するというタイプの表現も多く見られるようになってきた。たとえば英語では先行の名詞が形容詞的に後続の名詞を直接的に修飾するのはごく一般的な表現形式である。一方、形容詞をはじめ修飾要素は原則として名詞に後続するフランス語では、後続の名詞が先行の名詞を何らかの意味で修飾・限定する場合は、原則として両者の間に *de*, *à*, *pour* その他の前置詞を介する構造を取る必要がある²。しかしこのような表現は構造的にはどうしても重くなる。

emballage cadeau のような表現が増えてきた理由については、分析的で長く重い表現を嫌って直接的でコンパクトな表現がより好まれるようになってきたからである、というようなことがすぐに考えられる。実際、後置名詞による修飾・限定についての先駆的な研究と言える Noailly (1990) もほぼそのような結論に至っている。後続の名詞が先行の名詞を前置詞なしで修飾・限定する現象には詳細に検討すべき問題点もあるが、いずれにしろ、たとえば分析的な *emballage pour cadeau* に対して *emballage cadeau* のような直接的でコンパクトな形式の使用が拡大しつつあるという現象は、現代フランス語の性格を語る上で避けて通れないものになっている。

以上のような現象の存在と関連して、やはり名詞＋名詞という構造を取る以下の例にみられるようなタイプの表現が存在する。例(1)(2)は *Le Bon Usage* からの、例(3)－(8)は Noailly (2006)からの例である。

- (1) *un vélo modèle course* 「競技用モデルの自転車」

¹ *genre* と *style* には文を導入する引用マーカー的な機能もあり、さらに *genre* はディスコース・マーカー的な発展を遂げた。これらは文法化がより進んだ結果と考えられる。これらの問題については春木(2016, 2020)を参照されたい。

² 一部に *Hôtel-Dieu* 「(パリの) 市立病院」(原義「神の家」) のように後続の名詞が先行名詞を修飾しているような表現があるが、これは後続の名詞がもともとは被制格に置かれて属格の働きをしていた古い時代の表現が残ったものである。中世の散文作品のタイトル *La Mort le roi Artu* 「アーサー王の死」なども同様である (*le roi Artu* は被制格)。

- (2) un pyjama *taille 50* 「サイズ 50 のパジャマ」
- (3) un manteau *couleur aubergine* 「紫色のコート」
- (4) une édition *format poche* 「ポケット版の本」
- (5) une grande fille *format topmodel* 「トップモデル的な背の高い女性」
- (6) un fusil *modèle 1916* 「1916 年型の銃」
- (7) une location *formule weekend* 「週末専用のレンタルプラン」
- (8) un champion *catégorie poids plume* 「フェザー級のチャンピオン」

これらの表現の特徴は、名詞が三つ並ぶ構造を取っている点である。いずれもヘッドの名詞の後ろに「色、サイズ、形式、モデル」などを表わす名詞が来て、それらのカテゴリーに関して最後の名詞によってサブカテゴリー化を行なっている。意味構造的には (1)であれば *modèle course* 「競技用モデル」全体が先行名詞 *un vélo* を修飾・限定しているのである。使われている *modèle, taille* などの名詞はいずれもあるカテゴリーに関して内容の指定が必要な名詞類である。(1)であれば *modèle pour course*、(4)であれば *format de poche* のように前置詞を介して指定を受けることもできるが、いわば指定を必要としているということで、サブカテゴリーの特徴を指定する名詞を引き寄せる力が強いと考えられる。そのことがより直接的な同格的表現を生み出した大きな理由であろう。Noailly (2006)はこれらの表現形式を用いることで前置詞の多用を避けることができるという (*ruban de couleur d'aubergine*→*ruban couleur aubergine*)。また彼女も指摘するように、これらの表現においては *couleur, format, catégorie* といった名詞を省略して、*un manteau aubergine* とか、*un champion poids plume* のようにより短かくコンパクトに言えることも多い。つまり *couleur* などの名詞はカテゴリーを指示するだけで実質的意味内容に乏しく、*façon* のように後続の名詞と一体となって新たなカテゴリーの構築を要請するという強い操作は認められない。単に色なら色というカテゴリーを指定してヘッド名詞と修飾・限定の内容をもたらす後ろの名詞とをつなぐ役割を果たしているだけと言える。ただしその修飾・限定は色というカテゴリーの中での特定の詳細な指定をするサブカテゴリー化という操作と考えることはできる。このようにカテゴリー化のレベルの違いなどもあるが、名詞を重ねるという構造上からも、春木 (2016)で取り上げた *côté, niveau, genre, façon, style* などの機能語化している名詞などの場合とある意味、連続的な現象と考えることが可能である。

本稿では、上に挙げた表現の中から二次的な色彩を表わす表現で用いられる *couleur* という語に焦点を当て、名詞による修飾・限定という観点から *couleur* を含まない場合も含めて二次的な色彩を表わす表現に関するいくつかの問題を考察する。

2. 機能語 *couleur* と二次的色彩表現

2. 1. 表現形式

まず、実際に *couleur* を用いた色彩表現の実例を見てみよう。基本的な構造は<ヘッド名詞+*couleur*+限定の名詞>というように名詞が三つ連続するものである。

(9) une Mercedes *couleur saumon* stationnée devant moi

「私の前に停まっているサーモンピンクのメルセデス」³

(10) La maîtresse avait une belle permanente *couleur sable*, comme si elle avait une tempête du désert sur la tête, je trouvais ça très beau. (Bourdeaut : 39)

「先生はまるで砂漠の嵐を頭にのせているような砂色の美しいパーマをしていた」

例(3)(9)(10)では、ヘッドの名詞、*couleur*、そしてある色を呈する物を表わす名詞という構造を取っている。三つ目の名詞は意味の拡張を受けて、それぞれ「ナス色の」「サーモンピンク色の」「砂色の」という形容詞と考えることもできる。実際これらの語については多くの辞書に形容詞の項が設けられている。ある名詞が二次的な色を表わすために後置されて用いられる頻度が高くなれば辞書に形容詞の項がたてられるが、しかし性数については無変化であり名詞性が強いことには変わらない。そもそも *saumon* や *aubergine* が色を表わす形容詞であるならば、*couleur* は意味上も構造上も必要ないのである。実際、*saumon* などが形容詞かどうかは別として、これらの例は *couleur* なしでも成立する。それではどうして *couleur* が用いられるのだろうか。それは *aubergine* や *sable* などが名詞として「ナス」や「砂」を表わしているのではなく、その名詞の指示対象が持つ特徴的な色を表わしていることを認識しやすくするという理由が少なくともその起源にあったと考えられる。

couleur は名詞が指示対象のモノからそのモノが持つ色へと比喩的に意味が拡張されている場合に、いわばワンクッションとして「～のような色」というような意味を担っている(cf. *comme*)。筆者は機会ある毎にフランス語が隠喩的表現を好むということを指摘してきたが、このフランス語の隠喩的表現を好むという性格が、色彩表現において *couleur* を省略した「隠喩的な構造」が受容される背景にもあると考えられる⁴。

couleur に後続して色彩表現を作る *aubergine* などの名詞要素は、上で述べたように性数について無変化であれ少なくとも辞書においてはその物の色を表わす形容詞として記述されていることが多い。ただ二次的な色を表わす名詞の中には名詞性が強く <*couleur de*+名詞>という構造をとるものもある。たとえばある種の「灰色」を表わす *couleur de muraille* という表現は *un manteau couleur de muraille* のように前置詞 *de* を取ることが比較的多い。このような名詞も存在するが、一般的に現代フランス語において *couleur* と後続の名詞表現との間につなぎの前置詞 *de* が用いられる頻度はかなり低いようである。筆者の収集例の中でも *couleur de*+名詞という形を取る例は非常に少なかった。

(11) *cheveux couleur de maïs* 「トウモロコシ色の髪」

(12) (ある女性の描写) *Une créature aux jambes interminables, à la peau d'albâtre et aux cheveux couleur de rouille.* (Musso : 77) 「錆色の髪」

³ 文の形での引用の場合以外は例の出典は省略する。出典のない例の冠詞の有無および冠詞の定・不定の別については引用元のままである。また色彩表現以外は理解に必要な部分のみを訳している。出典の指示は作者の姓とページ数のみとする。具体的な引用作品は引用作品欄を参照されたい。

⁴ 様々な現象において日本語が直喩的な表現を好むのに対して、フランス語が隠喩的な表現を好むという傾向があるというのが筆者の考えであるが、それについては春木(2017)や春木(2021)を参照されたい。

(13) Le ciel offrait une toile de fond bleu Klein, aux feuilles *couleur d'ambre*.

(Margerand : 197)

「木々の琥珀色の葉に空がクラインブルーの背景となっていた」

以上の例の *maïs, rouille, ambre* も *de* を介さず *couleur* に後続して用いることもできる⁵。

二次的な色を表わす表現には *café au lait* 「カフェオレ色」(例 : *des tourterelles café au lait* 「カフェオレ色のキジバト」) や *caca d'oie* 「黄緑色」(例 : *des chaussures caca d'oie* 「黄緑色の靴」) のような複合名詞も多く見られるが、そのような複合名詞の場合も *de* を介さないで *couleur* に直接後続することが多い。

(14) *cheveux couleur café au lait* 「カフェオレ色の髪」

(15) *tabourets d'école couleur caca d'oie* 「黄緑色の学校用スツール」

(16) *mocassins couleur saint-émilion* 「あかね色のモカシン」

(17) *les étagères couleur bois d'ébène* 「黒檀色の棚板」

(18) *une lumière phosphorescente, couleur menthe à l'eau* 「透明感のある緑色の輝く光り」

(19) *un toubib au bronzage couleur pain d'épice* 「キャラメル色に日焼けした医者」

また *couleur* が導入する名詞が形容詞を伴う表現もよく見られる。以下の *saumon nacré* も *beurre frais* も色彩表現としてよく用いられるものであり、形容詞を伴う場合は<名詞+形容詞>がある程度、色彩表現として定着したものである場合が多いことが予想される

(20) *le fard couleur saumon nacré* 「光沢のあるサーモンピンク色の白粉」

(21) *les candélabres allumés projetaient un halo couleur beurre frais sur le revêtement de marbre des murs.* (Szabó : 219)

「ともされた大燭台が壁の大理石の上に薄黄色の輝きを投げかけていた」

以上、*couleur+de+名詞*、*couleur+名詞*、*couleur+複合名詞*、*couleur+名詞+形容詞* という形式の例をみたが、いずれも *couleur* 以下の要素が二次的な色を指定して *couleur* を通してヘッド名詞を色彩について修飾・限定をしている。このような表現における *couleur* は日本語のたとえば「錆色の」という表現の「色の」という部分に対応している。日本語の場合は基本色⁶、および基本色を表わす要素を含んだ形式の場合以外は原則として「色 (の)」という部分が無いと表現が成立しないか、修飾要素が色を限定していることが理解できない場合が一般的である⁷。この点でフランス語とは対照的である。

couleur を用いた表現の中には(22)のように *couleur* の後ろに限定を受けた基本色が来る

⁵ *ambre* 「琥珀色、黄褐色」は *d'ambre* のように *de* と共に用いられることが比較的多いようである。また名詞 *ambre* ではなく、*ambré* という形容詞が用いられることも多い。

⁶ ここで基本色と言うのは、日本語に関しては一般的に「～色」という形式を取ることなく用いることができる主要な色という便宜的な分類であって、色彩科学的に厳密に定義できるようなカテゴリーのことではない。

⁷ たとえば紺に対して茄子紺は「色 (の)」がなくても使用できる。やや文学的な表現になるが「利休鼠の雨が降る」の「利休鼠」はねずみ(色)という主要な色のサブカテゴリー表現であって例外ではない。伝統色の中には「蘇芳」や「お納戸」のように「色」なしで用いられる二次的な色彩表現も若干存在している。本稿では日本語については深くは立ち入らず簡略化して比較していることをお断りしておく。(外来語による色彩名についても考慮していない。)

場合がある。couleur を伴わない例も挙げておく。

(22) une voiture *couleur vert pomme* 「黄緑色の車」

(23) une pèlerine *vert pomme* 「黄緑色の袖無しマント」

vert「緑」は基本色を表わす語であり単独で名詞にかかる場合は形容詞として性数の変化をする。しかし基本色を表わす形容詞も couleur のあるなしにかかわらず限定要素を伴うと性数無変化で用いられることはよく知られている。(ちなみに(22)でvertに先行するcouleurも名詞としては女性名詞である。)

2. 2. couleur の機能

couleur は本来は名詞であるが、ここで問題にしている構造においては後続の要素と共に全体として「～色の」という表現を構成している。couleur 以下全体を名詞句と考えれば、ヘッド名詞に対して同格的にかかっている。ただ現行の辞書の中にはこのような構造を取る couleur を無変化の形容詞としているものもある。それは couleur を名詞に後置したこの種の表現の頻度が高いことによると思われるが、そのような分析には無理があると言わざるを得ない。たとえば *dessert maison* 「自家製のデザート」のように後続の名詞が先行の名詞を修飾・限定する名詞＋名詞という構造において、後置されるある特定の名詞の頻度が高くその適用範囲が拡大したものについては無変化の形容詞とする辞書の扱いは、少なくとも外国語学習という観点からは理解出来る。実際、*maison* については上記のような用法についてはほとんどの辞書が無変化の形容詞としている。しかし、さらに後置要素を必要とする couleur の場合と *maison* の場合とでは表現の構造そのものが異なっている。いずれにしろ *dessert maison* のような表現における *maison* や、ここで問題にしている構造における couleur の品詞を云々することにはそれほど意味はない。重要なのはその機能である。

機能語としての *niveau* や *genre* が、元々は前置詞句の中の中心的な名詞が前後の前置詞や冠詞が省略されてその機能を拡大して文法化してきたものであったように、couleur にも前置詞句的な表現が元にあったと考えることもできる。実際、前置詞によって導入されている例もある。

(24) Sur ce cliché *aux couleurs délavées*, Louis a deux ans, (...). (Sandrel :278)

「全体がにじんだ色のようにになっているこの写真ではルイは2歳である」

(25) (...) une simple fiche dans une chemise *à la couleur bleu ciel* qui a pâli avec le temps. Presque blanc, lui aussi, cet ancien bleu ciel. (Modiano :11)

「時と共にその色が褪せてきた空色の書類鞆の中の一枚のカード」

(26) des uniformes forestiers *de couleur kaki* 「カーキ色の森林管理員の制服」

(27) des chaussures de ski *de couleur bordeaux* 「ワインレッドのスキー靴」

couleur を導入する前置詞には de または à が見られる。ただ、(24)の例は特定の色彩を表わすというよりは写真全体の色がにじんだようになっているという意味であり、いわゆる特徴を表わす à による表現であり、本稿で問題にしているような表現とは少し違っている。一方、(25)では une chemise「書類鞆」の色を表わすだけなら une chemise *couleur bleu ciel*,

もしくは *de couleur belu ciel* としても意味は変わらないが、この例では続く文において靴の色 *couleur bleu ciel* を対象とするので、定冠詞を伴う本来の名詞として導入するために特徴を表わす前置詞 *à* を取っていると考えられる。このように *à* によって導入されている場合は別の理由によるものであり、*couleur* を含む表現の出発点に十全な前置詞句があったと仮定すると、それはやはり以下の様な *de couleur de*+名詞という構造であろう。

(28) *un manteau de couleur de muraille* 「灰色のマント」

ところで二次的な色の表現においては、以下のように *couleur* だけでなく、基本色を表わす語も *couleur* を介さずに二次的な色を表わす要素を導入することができる。さらには *couleur* と基本色を表わす語が共に用いられる場合もある。

(29) *des cheveux couleur paille* 「麦わら色の髪」

(30) *une cravate jaune paille* 「麦わら色のネクタイ」

(31) *du tissu couleur jaune paille* 「麦わら色の布」

二次的な色というのは、一般に基本色のバリエーションとして認識される。たとえば上記の例の「麦わら色」というのはフランス語においては *jaune* 「黄色」のサブカテゴリーとして認識されている⁸。 *jaune paille* と表現する場合は色彩の基本カテゴリーとして *jaune* が明示化されていることになる。さらに *couleur* が用いられる場合は、修飾・限定が色彩についてであるということが明示されるわけである。従って *couleur jaune paille* という表現は意味的にはかなり余剰的な表現ということになるが、商品の説明のような文脈ではよく見られる。逆に二次的な色合いを表わす意味が定着し、文脈的にも問題がなければ *manteau aubergine* 「ナス色のコート」のように直接的な修飾・限定が可能になるのである⁹。

ときに以下のような変則的な表現も見られる。

(32) *Celle (=blouse 「仕事着」) des infirmières sont roses, celles des chefs de service, blanches et celles des aides-soignantes, vertes, couleur poubelle.* (Perrrin : 56)

「看護助手の仕事着は緑、ゴミ収集容器のあの緑色である」

当該箇所を文の形で書けば *les blouses des aides-soignantes sont vertes, couleur poubelle* となる。修飾要素がなく基本色を表わす *vert* は形容詞として性数の一致をしているが、語り手はさらに緑のニュアンスを明示（確認）するために、二次的な色彩表現である *couleur poubelle* をあとから付加しているのである¹⁰。カンマを挟まない、つまり後からの確認では

⁸ 各言語、すなわち各文化において色彩表現の指示する範囲が特に周辺部分においては厳密に対応しないことは言うまでもない。フランス語と日本語に関しては、一般に「黄色」と訳される *jaune* が指示する範囲が日本語話者が「黄色」に対して持つイメージとかなり違う場合がある。シムノンのよく知られた作品に *Le chien jaune* 「黄色い犬」というタイトルのものがあるが、ぬいぐるみや童話ならともかく、「黄色い犬」という日本語の表現自体が既に不自然である。これに関連して日本語の「赤犬」という表現の「赤」が表わす色の範囲も考え合わせると興味深い。

⁹ ただし *paille* については *cheveux paille*、*cheveux de paille* という表現は色彩表現ではなく乾燥してチリチリになった髪の様態を表わすので、*paille* を色彩表現として理解するには *couleur* や *jaune* が必要である。また *bleu nuit* 「濃紺色」のように基本色を表わす語を省略すると色彩表現として理解しにくいものもある。これらの表現では2語がより緊密な一体をなして二次的な色を表わしている。これら以外にも基本色に何らかの要素が後続・付加されて二次的な色彩のニュアンスを表わす表現形式にはいくつかのタイプがあるが、本稿では詳細に立ち入る余裕はない。

¹⁰ (*couleur*) *vert poubelle* という表現はたとえば *vert bouteille* 「深緑色」などとは異なりほとんど用いられておらず、色彩表現としては一般的ではないと思われる。そのことが結果的に例(32)のような表現を生み出した可能性もある。

なく *vert couleur bouteille* 「深緑」のように＜基本色+couleur+二次的なニュアンスを表わす名詞＞という形式も若干は存在するようである。

参考までにここまでに見たいくつかの表現を基本色を明示した形で示しておく。

- (33) *vert caca d'oie* 「黄緑色」、*brun café au lait* 「カフェオレ色」、*rouge rouille* 「錆色」、*jaune beurre frais* 「薄黄色」、*violet aubergine* 「ナス色」、*rouge / rose saumon* 「サーモンピンク色」、*brun pain d'épice* 「キャラメル色」

2. 3. *d'un bleu outremer* 型について

二次的な色彩を表わす表現が *couleur* を用いないで以下の様な形式を取る場合がある¹¹。

- (34) *je remarquais combien ses yeux étaient clairs, gris, ou d'un bleu délavé. Gris-bleu.*
(Modiano : 73)

「彼の眼がどれだけ澄んでいて灰色、というかにじんだ青色なのだとすることに気付いた。つまり灰青色なのだ」

- (35) *ses yeux d'un bleu outremer* 「群青色の彼女の眼」

- (36) *La forêt était étourdissante. De toutes petites feuilles d'un vert très clair, d'un vert tellement naturel qu'il me semblait artificiel, le vert de quand on pense au vert :*
(Marie : 118)

「森は輝くばかりだった。とても明るい緑色、あまりに自然な緑でまるで人工的に思われる緑、緑色のことを考えたときに浮かぶ緑をした無数の小さな葉がいっぱいで。」

- (37) *Ses yeux d'un beau gris délavé brillaient d'un éclat espiègle, (...)* (Giordano : 11)
「彼女のきれいなにじむような灰色の眼はいたずらそうな光で輝いていた」

- (38) (...) *l'herbe y est d'un vert si profond, la maison est juste en face de l'Angleterre, on peut voir la côte par temps claire.* (Haroche : 36)
「草はそこではあまりに深い緑色をしていた」

- (39) (バッグの宣伝コピー) *Sacoche en cuir de vachette noir et tissu bleu nuit. Sacoche idéale pour de petites sorties. Tissu lainage d'un bleu nuit intense.*
「黒の仔牛皮と紺色の毛織物を用いたバッグ、(...) 深い紺色の毛織物」

これらの例では色彩を表わす *vert* などは名詞としてサブカテゴリーであることを表わす不定冠詞を取り、さらに形容詞化のための前置詞 *de* を取っている。(36)では *vert* は従属節中で代名詞で受けられている。色彩表現が属詞となる(38)では *si profondément vert* と *vert* を形容詞として文を構成できないことはないが、*d'un vert si profond* とするほうがエレガントである。この2例を除いた例ではここまでに見てきたように *de* と不定冠詞を取らずに *ses yeux bleu outremer* のように直接的に修飾・限定することができる。興味深いのは例(39)で、最初は *tissu bleu nuit* と直接的な形式になっているが、その後で *Tissu lainage d'un bleu nuit intense* と *de*+不定冠詞+色彩名詞の形式に変わっている。二つ目の例では *bleu nuit intense* と程度を強める表現が付加されてさらにサブカテゴリー化されているので不

¹¹ 1例のみだが *couleur* を含んだ...*d'un vert couleur bouteille* という例も採集例の中に見つかった。

定冠詞を伴う名詞としての表現が好まれたかとも考えられるが、もちろん *moquette (couleur) bleu nuit intense* のような直接的な表現も可能である。繰り返すが *de* を取る形式では色彩を表わす *vert* などはもちろん名詞である。そして色彩を表わす名詞は基本的に男性名詞である。バラという花を表わす場合は女性名詞である *rose* も、ピンク色という意味の色彩名詞の場合は男性名詞となる(例：*une robe d'un rose saumon*)。

2. 4. 直接的な表現の発展

さて *ses yeux d'un bleu d'outremer* という分析的な形式と *ses yeux bleu outremer* という直接的な形式の存在は、*côté* や *niveau* が十全な前置詞句から前置詞や冠詞を失って機能語化した場合の形式の変化に対応しているように見える(例：*au niveau de transport* → *niveau transport* 「輸送に関しては」)。

色彩表現の場合は *couleur* を含む場合と含まない場合とが存在するので、問題が少し複雑になる。*couleur* という語を含む場合は既に述べたように *<de couleur de+名詞>* という形式から文法化によって *couleur* が色彩のサブカテゴリーを導入する機能語になったと考えられるが、それでは *couleur* を介さずに直接先行の名詞の指示対象が持つ二次的な色彩を表わす *une voiture bleu nuit* のような表現はどのようにして誕生したのだろうか。それには複数の可能性が想定できる。まず文法化を経て機能語となった *couleur* で導入される *une voiture couleur bleu nuit* タイプの表現において余剰的な *couleur* が省略されて *une voiture bleu nuit* という形式が生まれたということが考えられる。実際、基本色を表わす *bleu* の意味には *couleur* が表わす色彩という意味は含まれている。従って意味の余剰性がよりコンパクトな形式の使用を促したということになる。

一方、2.3.で見たような前置詞 *de* によって導入される *ses yeux d'un bleu outremer* のような表現から直接的に前置詞と不定冠詞が省略されて *ses yeux bleu outremer* ができたという可能性も考えられる。*d'un bleu outremer* のように不定冠詞が用いられている場合はブルーの二次的な色(サブカテゴリー)であることが明示されている。しかし *bleu outremer* が色の表現として十分定着すればサブカテゴリーであることを不定冠詞の使用で明示する必要はなくなる。そして *bleu outremer* という表現もより緊密になり、不定冠詞と共に前置詞も省略されて直接に先行の名詞を修飾・限定しやすくなると考えられる。二次的な色彩を表わす場合に形容詞は無変化になるとされるが、*ses yeux bleu outremer* の *bleu* はあくまでも名詞と考えられる。*couleur* が用いられる場合の *couleur bleu nuit* のような表現においても *bleu*、あるいは *bleu nuit* は(無変化の)形容詞ではなく名詞と考える方がフランス語の修飾・限定の現代的な傾向に合致する。二次的な色を表わす場合など限定が付くと色彩の形容詞は無変化になるという、理由のない不自然な説明もする必要がなくなる。

それでは実際には上に述べた二つの変化のプロセスのどちらが起こったのだろう。この二つのプロセス、つまり *couleur* を含む表現が *couleur* を省略して用いられるようになる変化と、*de* と不定冠詞を用いた表現が *d'un* を省略して *ses yeux bleu outremer* になる変化はいわば同時に生じたと考えるべきだろう。ただ現実的には二次的な色を表わす表現の

バリエーションの一つとして **ses yeux bleu outremer** 型が出現したのであって、フランス語話者の意識やフランス語の歴史の中ではその起源となった表現は上記の二つのいずれであるかは判然としないと言える。フランス語において後続の名詞表現によって先行のヘッド名詞を修飾・限定するという構文が用いられる頻度が高くなっていく傾向に助けられて **des yeux couleur bleu nuit** や **des yeux bleu nuit** という表現形式が出現して、いくつかのバリエーションを巻き込みながら定着してさらに発展してきたと考えられる。

3. 結論に替えて

couleur という機能語に焦点を置きつつ、**couleur** を使用しない場合も含めて現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現の実態を観察して、特に後続名詞による先行名詞の修飾・限定という観点から考察をおこなった。

まず **couleur** という語の有無も含めてその表現形式が多彩であることが確認できた。主な表現形式を再掲しておく¹²。

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| i) des yeux de couleur d'outremer | ii) des yeux couleur d'outremer |
| iii) des yeux couleur outremer | iv) des yeux bleu outremer |
| v) des yeux couleur bleu ciel | vi) des yeux outremer / des yeux ciel |
| vii) une robe bleu couleur océan | viii) des yeux d'un bleu outremer |

最初に分析的な構文を取るか直接的な表現を選ぶかという選択がある。次に、直接的な表現形式においては(色彩 **couleur**) → (基本色) → (二次的な色) という三つのカテゴリーレベルのうち、上位二つのカテゴリーを共に明示するか、どちらか一方だけを表わすかが選択され、その結果として選択された表現をどう組み合わせるかによっていくつものバリエーションが生まれる。直接的な表現形式においては名詞が二つないしは三つ連続することになるが、それらの表現が定着して広く使われるようになった背景には、現代フランス語において後続名詞が先行のヘッド名詞を修飾・限定するという「構文」が好まれる傾向が拡大・発展してきたということがあるのは間違いないだろう。

類似の形式を取る **côté** や **niveau**、あるいは **genre**, **façon** などの文法化の場合と異なり、色彩表現の場合は前置詞を用いる分析的な形式から直接的な形式に歴史的に変化したというより、現代フランス語に見られる名詞を連続させるいくつかの類似の表現の発展の影響を受けて直接的な形式が生まれ、次第に一般的になっていったと考えられる。その一連の流れの中で **couleur** も機能語として文法化を経たと考えられる。春木(2016)で検討した表現の中にも **question** のように起源となる前置詞句がないにもかかわらず、**côté** や **niveau** など意味領域や機能が似た名詞が前置詞句から出発して機能語へと文法化していく現象の影響を受けて、機能語としての役割を獲得した例もある。二次的な色彩を表わす複数の表現形式もその変化のプロセスは明確ではないが、現代フランス語が許容する<名詞+名詞(句)

¹² できるだけヘッドの名詞と二次的なニュアンスを表わす表現を同じにしたが、実例が確認できなかった場合はヘッドの名詞と二次的なニュアンスを表わす表現を変更した。実際、ヘッドの名詞や二次的な色彩を表わす表現に関する様々な要因で、常にすべての形式が可能になるわけではない。

＞という構文形式の中で色彩表現特有の条件に合わせて様々な表現が用いられるようになり今に至っていると考えられる。

二次的な色彩表現においても一つ見逃せないのは、文法化を経て機能語として確立した *couleur* を省略した表現が可能であり、さらには基本色を表わす語も省略して二次的な色彩を表わす要素のみで表現が成立する場合が多いという点である。これはいわば「～のような色」を表わす要素なしで二次的な色彩を表わしており、隠喩的な表現形式と考えることができる。一方、日本語では基本色以外の場合は「麦わら色」のように「色」という要素が必要であり、これは直喩的な表現と言える。名付けにおいても日本語は直喩を好むが、フランス語は *croissant* 「三日月」という語で三日月型のクロワッサンを表わすような隠喩的な表現を好む。オノマトペ表現に関しても、日本語は「(と) いう音」と直喩的に導入するが、フランス語ではオノマトペがそのまま文の構成要素になることができる。

本稿ではフランス語における二次的な色彩を表わす表現という、一見マイナーに思える現象について考察したが、それらの表現においても、フランス語で拡大発展をみている先行名詞を後続名詞が修飾・限定するという構文への嗜好と、フランス語が全般的に隠喩的な表現を好むという現代フランス語を特徴付ける二つの傾向を如実に見ることができた。

[引用作品]

Bourdeaut, Olivier, *En Attendant Bojangles*. 2015, Finitude, ; Darrieussecq, Marie, *Notre vie dans les forêts*. 2017, folio. ; Giordano, Raphaëlle, *Ta deuxième vie commence quand tu comprends que tu n'en as qu'une*. 2015, Eyrolles. ; Haroche, Raphaël, *Retourner à la mer*. 2017, folio. ; Modiano, Patrick, *Dans le café de la jeunesse perdue*, 2017, folio. ; Margerand, Laure, *Le Jardin des étoiles mortes*. 2019, J'ai lu. ; Perrrin, Valérie, *Les oubliés du dimanche*. 2015, Le livre de poche. ; *Les restaurants du cœur, 13 à table !* 2021, pocket. ; Sandrel, Julien, *La chambre des merveilles*. 2018, Le livre de poche. ; Szabó, Magda, *La ballade d'Iza*. 1963, Le livre de poche.

[参考文献]

Grevisse, Maurice (1975), *Le bon usage (10^{ème} édition)*. Duculot.

Noailly, Michèle (1990), *Le substantif épithète*. PUF.

Noailly, M. (2006), Quoi de neuf côté préposition ?, *Modèles linguistiques* 53 : 75-90.

春木仁孝(2016)「話し言葉における名詞の機能語化について ―côté, question, façon, genre, style, histoire de, etc.―」『フランス語学の最前線』第4巻 : 85-125. ひつじ書房.

春木仁孝(2017)「直喩的な日本語、隠喩的なフランス語」『時空と認知の言語学』VI (大阪大学大学院言語文化研究科) : 31-40.

春木仁孝(2020)「疑似引用マーカーあるいは発話連結辞としての *genre*」『時空と認知の言語学』IX (大阪大学大学院言語文化研究科) : 21-30.

春木仁孝(2021)『フランス語の発想―日本語の発想との比較を通して』くろしお出版.

渡辺伸治

1. はじめに

渡辺（印刷中）では、gehen/kommen（以下、g/k）、hin/her のダイクシス性、視点性は現代語と中高語で違いがあるのか、あるとすればどのような違いかを、主に統計的な観点から考察した。hin/her に関しては、g/k と共起している場合のみを考察対象としたが、主な結論は、hin/her は視点性、ダイクシス性自体の変化は見られないが、現代語のほうが g/k 総数に対する出現率が高く、中高語よりも発達しているというものであった。

また、hin/her は、「単一的 hin/her」と「複合的 hin/her」に分類し、複合的 hin/her はさらに dorthin など da/dort/hier/wo と共起した場合と、hinaus などの前置詞と共起した場合に下位分類した。その上で、現代語では特に複合的 hin/her、その中でも前置詞と共起した場合の複合的 hin/her の発達が見られることを述べた。

しかし、渡辺（印刷中）で使用した統計は hin/her+g/k 総数の統計であり、hin+gehen, her+gehen, hin+kommen, her+kommen に分割、細分化したものの統計ではなかった。本稿の目的は、渡辺（印刷中）の補足として細分化した統計を提示し、hin/her+g/k の組み合わせの違いにより出現率の違いがあるのか、あるとすればどのような違いかを考察することである。¹

なお、渡辺（印刷中）では、hin/her+g/k を階層的にまず単一的 hin/her と複合的 hin/her に分類し、さらに複合的 hin/her を dorthin のような場合と hinaus のような場合に分類した。しかし、この方法では、これら三つのタイプの相対的な出現率の違いがわかりにくいため、本稿では三つのタイプを同じレベルで分類した統計を用いる。

また、本稿では、渡辺（印刷中）の「単一的 hin/her」「複合的 hin/her」という用語は「単一 hin/her」「複合 hin/her」に変更する。さらに、複合 hin/her のうち dorthin などのような場合を「D 複合 hin/her」、hinaus などのような場合を「P 複合 hin/her」と名付けることにする。

用いる資料は渡辺（印刷中）で用いたニーベルンゲンの歌（NL）とトリスタン（TR）の原文と現代語訳がパラレルになっているそれぞれ二つの版である。²

¹ 考察は、組み合わせによる違いがより多様に現れる現代語訳を中心におこなう。以下では、原文ではどの組み合わせであっても単一タイプが優勢であったものが、現代語訳でも基本的には P 複合タイプが優勢になるが、一部の組み合わせでは単一タイプ、D 複合タイプが優勢になることを見る。

² NL は以下のものである。それぞれ BR, SCH と略す。BR: *Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung*. Hrsg., übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. Brackert. Fischer. 1970 (Teil 1), 1971 (Teil 2). SCH: *Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch*. Nach der Handschrift B, hrsg. von U. Schulz. Ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse. Reclam Universal-Bibliothek. 2011. TR は以下のものである。それぞれ KR, H と略す。KR: Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach dem Text von F. Ranke, neu hrsg. ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von R. Krohn. 3 Bde. Reclam Universal-Bibliothek. 1993. H: Gottfried von Straßburg: *Tristan und Isolde*. Hrsg. von W. Haug und M. G. Scholz. Mit dem Text des Thomas, hrsg. übersetzt und kommentiert von W. Haug. 2 Bde. Deutscher Klassiker Verlag. 2011.

2. 原文の hin/her+g/k

本章では原文を対象に考察する。まず hin/her+g/k 総数に関する表 1 である。

	g/k 総数	hin/her+g/k 総数		単一 hin/her		D 複合 hin/her		P 複合 hin/her	
NL 原文	775	57	7.4%	46	80.7%	6	10.5%	5	8.8%
TR 原文	848	93	11.0%	67	72.0%	16	17.2%	10	10.8%

表 1 原文における hin/her+g/k の出現数 (率)

表の左から、g/k 総数³、hin/her+g/k 総数と g/k 総数に対する出現率、hin/her+g/k 総数を単一 hin/her、D 複合 hin/her、P 複合 hin/her の三つのタイプに下位分類した場合の出現数 (率) である。下位分類の三つのタイプの%は、hin/her+g/k 総数が 100%になるように計算してある (以下同様)。太字はもっとも出現率が高いタイプである (以下同様)。

表からは、渡辺 (印刷中) 同様、NL/TR ともに原文では単一 hin/her の出現率が著しく高く、D 複合、P 複合 hin/her は発達していないことが見て取れる。また、hin/her+g/k 総数のイタリックの部分からは、TR のほうが hin/her+g/k の出現率が高いことがわかる。さらに、単一 hin/her は TR のほうが出現率が低く、D 複合、P 複合 hin/her は TR のほうが出現率が高い。渡辺 (印刷中) では、g/k に関し TR のほうが現代語に近い性質を持つ環境があることを見たが、hin/her+g/k に関しても TR のほうが現代語に近いといえよう。

続けて、g/k 総数を g 総数と k 総数に分割し、hin/her+g/k 総数を hin+g、her+g、hin+k、her+k に細分化した場合の出現数 (率) の表 2 から表 5 である。⁴

	g 総数	hin+g 総数		単一 hin		D 複合 hin		P 複合 hin	
NL 原文	401	31	7.7%	24	77.4%	5	16.1%	2	6.5%
TR 原文	382	35	9.2%	24	68.6%	9	25.7%	2	5.7%

表 2 原文における hin+g の出現数 (率)

	g 総数	her+g 総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL 原文	401	10	2.5%	8	80.0%	0	0.0%	2	20.0%
TR 原文	382	16	4.2%	13	81.3%	1	6.3%	2	12.5%

表 3 原文における her+g の出現数 (率)

	k 総数	hin+k 総数		単一 hin		D 複合 hin		P 複合 hin	
NL 原文	374	5	1.3%	3	60.0%	1	20.0%	1	20.0%
TR 原文	466	17	3.6%	11	64.7%	4	23.5%	2	11.8%

表 4 原文における hin+k の出現数 (率)

³ 原文、現代語訳ともに非分離動詞の g/k は含まない。

⁴ 以下、細分化した統計では出現数が 0, 1 など極めて少ない場合も見られる。このような場合には、出現数のわずかな変動であっても出現率が大きく変動し、出現率の妥当性に疑問が残ることには留意が必要である。特に母集団の数が少ない場合には留意が必要である。

	k 総数	her+k 総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL 原文	374	11	2.9%	11	100%	0	0.0%	0	0.0%
TR 原文	466	25	5.4%	19	76.0%	2	8.0%	4	16.0%

表5 原文における her+k の出現数（率）

表の太字の部分からは、組み合わせにより若干の違いはあるが、細分化した場合もすべての組み合わせで単一 hin/her の出現率が著しく高いことが見て取れる。hin/her+g/k 総数のイタリックの部分も見ておこう。これは、g/k 総数に対する hin/her+g/k の組み合わせごとの出現率だが、次の順番で出現率が高くなる。

NL: hin+k (1.3%)<her+g (2.5%)<her+k (2.9%)<hin+g (7.7%)

TR: hin+k (3.6%)<her+g (4.2%)<her+k (5.4%)<hin+g (9.2%)

NL/TR では、いずれにせよ hin+g の出現率がもっとも高く、hin+k の出現率がもっとも低い。出現率の増加の順番に違いはない。ただし、すべての組み合わせで TR のほうが NL よりも出現率が高い。これは hin/her+g/k 総数を対象とした表1に反映している。

3. 現代語訳の hin/her+g/k

3.1. hin/her+g/k 総数の統計

まず hin/her+g/k 総数を対象とした表6である。

	g/k 総数 ⁵	hin/her+g/k 総数		単一 hin/her		D 複合 hin/her		P 複合 hin/her	
NL/BR	393	88	22.4%	7	8.0%	32	36.4%	49	55.7%
NL/SCH	498	60	12.0%	20	33.3%	18	30.0%	22	36.7%
TR/KR	438	95	21.7%	24	25.3%	27	28.4%	44	46.3%
TR/H	373	85	22.8%	23	27.1%	25	29.4%	37	43.5%

表6 現代語訳 hin/her+g/k の出現数（率）

表からは、どの現代語訳でも P 複合の出現率がもっとも高いことがわかる。⁶ これは、これから三つのタイプを階層的に分類した渡辺（印刷中）の結論と同じである。

また、訳者のスタイルによる出現率の違いも見られる（表の枠付きの出現率）。すなわち、TR/KR と TR/H では出現率の違いがほとんどないが、NL/BR と NL/SCH では、NL/SCH の hin/her+g/k 総数の出現率(12.0%)が低く、NL/BR の単一 hin/her の出現率(8.0%)が著しく低い。これらの出現率はTRと比較しても大きく違うが、前章で見たようにNL原文の hin/her+g/k 総数の出現率は 7.4%であり、単一 hin/her の出現率は 80.7%である。相対的に見て NL/SCH のほうが原文に近いことになる。渡辺（印刷中）では、Hoffmann (2004) が NL/BR は原文を

⁵ 表6の g/k 総数が原文を対象とした表1と著しく異なるのは、本稿で利用したデータベースは原文の g/k の現代語訳での訳出状況を調査しているため、現代語訳のデータには現代語訳が g/k であっても原文が g/k ではないものは含まれていないからである。

⁶ ただし NL/SCH では単一 hin/her も出現率が比較的高く、出現率の違いが小さい。

比較的自由に訳し、NL/SCH⁷は比較的忠実に訳している旨の指摘をしているのを見たが、この指摘は hin/her+g/k 総数、単一 hin/her の出現率に関してもあてはまるといえよう。

3.2. hin+g, her+g, hin+k, her+k に細分化した統計

続けて、g/k 総数を g 総数と k 総数に分割し、hin/her+g/k 総数を hin+g, her+g, hin+k, her+k 総数に細分化した場合の出現数（率）の表 7 から 10 である。

	g 総数	hin+g 総数		単一 hin		D 複合 hin		P 複合 hin	
NL/BR 現訳	130	19	14.6%	4	21.1%	7	36.8%	8	42.1%
NL/SCH 現訳	205	23	11.2%	8	34.8%	9	39.1%	6	26.1%
TR/KR 現訳	164	29	17.7%	11	37.9%	7	24.1%	11	37.9%
TR/H 現訳	154	32	20.8%	9	28.1%	7	21.9%	16	50.0%

表 7 現代語訳 hin+g の出現数（率）

	g 総数	her+g 総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL/BR 現訳	130	7	5.4%	0	0.0%	0	0.0%	7	100.0%
NL/SCH 現訳	206	6	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	6	100.0%
TR/KR 現訳	164	2	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%
TR/H 現訳	154	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表 8 現代語訳 her+g の出現数（率）

	k 総数	hin+k 総数		単一 hin		D 複合 hin		P 複合 hin	
NL/BR 現訳	263	13	4.9%	1	7.7%	8	61.5%	4	30.8%
NL/SCH 現訳	293	11	3.8%	3	27.3%	4	36.4%	4	36.4%
TR/KR 現訳	274	21	7.7%	5	23.8%	14	66.7%	2	9.5%
TR/H 現訳	219	12	5.5%	2	16.7%	5	41.7%	5	41.7%

表 9 現代語訳 hin+k の出現数（率）

	k 総数	her+k 総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL/BR 現訳	263	49	18.6%	2	4.1%	17	34.7%	30	61.2%
NL/SCH 現訳	293	20	6.8%	9	45.0%	5	25.0%	6	30.0%
TR/KR 現訳	274	43	15.7%	8	18.6%	6	14.0%	29	67.4%
TR/H 現訳	219	41	18.7%	12	29.3%	13	31.7%	16	39.0%

表 10 現代語訳 her+k の出現数（率）

まず、hin+g, her+g, hin+k, her+k 総数の出現率の順位を簡単に見ておこう。表のイタリックの部分であるが、以下の順位になる。

⁷ Hoffmann (2004) は Grosse 版にもとづいているが NL/SCH の訳は Siegfried Grosse によるものである。

NL/BR: hin+k (4.9%)<her+g (5.4%)<hin+g (14.6%)<her+k (18.6%)

NL/SCH: her+g (2.9%)<hin+k (3.8%)<her+k (6.8%)<hin+g (11.2%)

TR/KR: her+g (1.2%)<hin+k (7.7%)<her+k (15.7%)<hin+g (17.7%)

TR/H: her+g (0.0%)<hin+k (5.5%)<her+k (18.7%)<hin+g (20.8%)

NL/BR 以外では hin+g 総数の出現率がもっとも高い。原文でも hin+g 総数の出現率がもっとも高く、現代語訳でも変動は見られない。her+g 総数の出現率が低い理由は次に述べる。

それでは表を細かく見ていこう。第一の問題は表 8 の her+g の特殊性である。上で her+g 総数の出現率が低いことを見たが、これは、現代標準語の g は、「ここ」への移動を表すことはできないというダイクシスに関する制約を持つため、単一 her と D 複合 her(基本的には hierher)の例は見られないことが理由になっている。ただし、TR/H 以外の現代語訳では her のダイクシスに関する制約が解除される P 複合 her の例(einhergehen, herangehen, herumgehen)が見られる。これは特に NL/BR で多く見られる。

第二の問題は訳者のスタイルの問題である(表の枠付きの出現率)。まず、NL/BR は表 9 の単一 hin+k の出現率(7.7%)と表 10 の単一 her+k の出現率(4.1%)が著しく低い。NL/SCH は表 10 の her+k 総数の出現率(6.8%)が比較的低い。以上の特徴は、前節の表 6 の hin/her+g/k 総数を対象にした統計で見られた NL/BR, NL/SCH の特徴に反映している。加えて、TR/KR は表 9 の P 複合 hin+k の出現率(9.5%)が著しく低い。⁸ さらに、NL/SCH と TR/H は表 9 の hin+k と表 10 の her+k で、単一、D 複合、P 複合 hin/her の出現率が比較的類似している。

第三は問題は hin/her+g/k の組み合わせごとの違いである。全体的に見て、表 9 の hin+k は D 複合 hin の出現率が高いが、それ以外の組み合わせでは基本的に P 複合 hin/her の出現率が高い。⁹ また、表 7 の hin+g の出現率は全体的に類似している。一方、表 9 の hin+k, 表 10 の her+k は、hin/her+g/k の組み合わせ、現代語訳の違いにより、バラつきが比較的大きい。以上、表 7 から 10 の特徴を三つ見たが、以下では、D 複合 hin+k, P 複合 her+k, 単一 her+k に対象を絞り、さらなる考察をおこなう。

3.3. D 複合 hin+k と dar

上で、表 9 の hin+k はどの現代語訳でも D 複合 hin+k の出現率がもっとも高いことを見たが、D 複合 hin は基本的に現代語の D 複合 hin(dorthin/dahin)に対応する中高語の dar と相関関係が強い。D 複合 hin+g のデータも合わせて挙げるが、表 11 は、表の左から現代語訳の D 複合 hin+g(k)の出現数、現代語訳の D 複合 hin+g(k)が原文では dar+g(k)である例の数、ならびに後者を前者で割った dar 率である。表を見ると、どの現代語訳でも hin+k で dar 率が高

⁸ ただし、上でも述べたように母集団の数、出現数が少ないため出現率の妥当性には疑問も残るが、少なくとも、NL/BR は単一 hin/her を避ける傾向があり、NL/SCH の her+k の出現率は他の訳と異なると言ってもよいであろう。

⁹ ただし、NL/SCH と TR/H では P 複合 hin+k の出現率が D 複合 hin+k の出現率と同じである。

い。原文の **dar** の影響が見られるということである。また、D 複合 **hin+k** の出現率が比較的高いのは、この場合の **k** は、**gelangen, erreichen** が類義語になる、到着が焦点化された用法の場合が多いことも理由になっていると考えられる。移動が生じていることを前提に移動主体が到着点に到着したことを焦点化するこの用法では、P 複合 **hin** を用いて到着点の様相を表示する必要性が弱まり、相対的に D 複合 **hin** の出現率が高まるということである。¹⁰

	D 複合 hin+g	原文 dar+g	dar 率	D 複合 hin+k	原文 dar+g	dar 率
NL/BR 現訳	7	4	57.1%	8	6	75.0%
NL/SCH 現訳	9	4 ¹¹	44.4%	4	3	75.0%
TR/KR 現訳	7	3	42.9%	14	10	71.4%
TR/H 現訳	7	1	14.3%	5	3	60.0%

表 1 1 現代語訳 D 複合 **hin+g/k** と原文 **dar+g/k** の出現数（率）

3.4. P 複合 **her+k** と移動過程系 P

表 7 から 1 0 の P 複合 **hin/her+g/k** を見ると、表 1 0 の P 複合 **her+k** は他の組み合わせと比べて特に NL/BR と TR/KR で出現数が著しく多く、出現率も高いことが特徴的である。この特徴は、表 7 から 1 0 の P 複合タイプの部分を抜き出し、総数、組み合わせごとの出現数、後者を前者で割った出現率として挙げた表 1 2 からも確認できる。

	P 複合 hin/her+g/k 総数	P 複合 hin+g 数(率)	P 複合 her+g 数(率)	P 複合 hin+k 数(率)	P 複合 her+k 数(率)
NL/BR 現訳	49	8 (16.3%)	7 (14.3%)	4 (8.2%)	30 (61.2%)
NL/SCH 現訳	22	6 (27.3%)	6 (27.3%)	4 (18.2%)	6 (27.3%)
TR/KR 現訳	44	11 (25.0%)	2 (4.5%)	2 (4.5%)	29 (65.9%)
TR/H 現訳	37	16 (43.2%)	0 (0%)	5 (13.5%)	16 (43.2%)

表 1 2 現代語訳 P 複合 **hin/her+g/k** の総数と P 複合タイプごとの出現数（率）

以上のように、P 複合 **her+k** の出現数（率）は特徴的だが、さらにもう一つの特徴がある。以下、P 複合タイプにおける P のタイプ、出現数の統計を提示し、P 複合 **her+k** にみられるさらなる特徴について考察する。

下の表 1 3 から 1 6 は、P 複合 **hin/her+g/k** に現れる P のタイプとその出現数、ならびにそれぞれの P 複合 **hin/her** を移動過程系 P 複合 **hin/her** で割った移動過程系 P 率の表である。移動過程系 P 複合 **hin/her** とは、表の中で枠で囲まれている **heran, herbei**¹², **hinab/herab**,

¹⁰ このように考えると、Latzel (1979) らが指摘するように **hin** 自体にも代名詞的性質があるため、D 複合 **hin(dorthin/dahin)**ではなく単一 **hin** で訳しても文意はほとんど変わらないと思われるが、**dar** の影響で D 複合 **hin** の出現率のほうが高くなっていると考えられる。いずれにせよ **dar** 自体の考察も含め、**hin/her** と **dar** の関係の考察は今後の課題としたい。

¹¹ 現代語訳が D 複合 **hin+g** であるが原文は **dar+k** である一例を含む。

¹² **herbei** を移動過程系 P とするかは議論の余地があるが、ここでは移動過程系 P に分類する。詳しい考察は

hinauf/herauf, hinunter/herunter, hinüber/herüber である。移動過程系 P は到着点への移動の過程を表示することに特徴がある。hinab/herab, hinauf/herauf, hinunter/herunter ではさらに上昇/下降という上下関係に関する性質も加わっている。一方、特に hinaus, hinein は起点、着点の空間様態を表示している点で移動過程系 P とは質的に異なっている。

また、訳者が原文の影響を受けることが考えられるため、現代語訳の P 複合 hin/her の箇所から原文の同一箇所に戻り、原文でも同じ P が用いられているかを確認した。原文ではほとんどの場合 hin/her が現れていない¹³が、表のカッコ付きの数字は P の出現数のうち原文でも同じ P が用いられている内数である。例えば、表 1 6 の TR/KR の herein9(6)は、現代語訳の herein は 9 例あり、そのうち 6 例は原文でも同じ in になっているということである。¹⁴ なお、カッコ付き数字がない P の原文は、現代語訳とは異なる P が現れているものが若干あるが、大多数は P が現れていない。

	P 複合 hin+g に現れる P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	hinab1(1), hinauf1, hinüber1, hinunter1(1), hinaus2, hinein2	8	50.0%
NL/SCH	hinab1(1), hinaus1, hindurch1, hinein1, hinweg2	6	16.7%
TR/KR	hinab1, hinauf1, hinüber1, hinunter1, hinaus3, hinein4	11	36.4%
TR/H	hinunter2, hinaus10, hinein4,	16	12,3%

表 1 3 現代語訳 P 複合 hin+g

	P 複合 her+g に現れる P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	heran1 einher6	7	14.3%
NL/SCH	heran2, herunter1, einher2, heraus1	6	50.0%
TR/KR	herum2	2	0.0%
TR/H	なし	0	12,3%

表 1 4 現代語訳 P 複合 her+g

	P 複合 hin+k に現れる P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	hinüber1, hinaus1, hinzu2	4	25.0%
NL/SCH	hinein1, hinzu3	4	0.0%
TR/KR	hinüber1, hinein1(1)	2	50.0%
TR/H	hinüber2, hinzu3(1)	5	40.0%

表 1 5 現代語訳 P 複合 hin+k

今後の課題としたい。

¹³ hin/her の発達には、原文では hin/her が付加されていない P に現代語訳では hin/her が付加されるという発達の仕方もある。詳しくは渡辺（印刷中）とそこで挙げられている参考文献を参照されたい。

¹⁴ 以下では原文 nider→現代語訳 ab/unter は同じ P としている。

	P 複合 her+k に現れる P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	<u>heran</u> 12, <u>herbei</u> 7, <u>herab</u> 2(2), <u>herauf</u> 2, heraus4, herein2(1), einher1	30	76.7%
NL/SCH	<u>heran</u> 3, <u>herab</u> 2(1), herein1(1)	6	83.3%
TR/KR	<u>heran</u> 12, <u>herbei</u> 6, <u>herab</u> 1, <u>herüber</u> 1, herein9(6)	29	69.0%
TR/H	<u>heran</u> 4, <u>herbei</u> 3, <u>herunter</u> 3, herein5(5), heraus1	16	62.5%

表 1 6 現代語訳 P 複合 her+k

以上、表 1 3 から 1 6 を見ると、P 複合 her+k の移動過程系 P 率は他の P 複合タイプよりも高いことがわかる。P 複合 her+k の原文ではほとんどの例で P が現れていないが、訳者はコンテキストから当該の k は移動過程を表していると判断し、原文にはない移動過程系 P を付加していることになる。

3.5. her+k の細分化と単一 her+(g→k)の様相

her+k は二つのタイプに細分化可能である。¹⁵ すなわち、現代語訳では同じ her+k になるが、原文に遡ると原文では g であったものが k で訳される場合と、原文では k であったものが同じ k で訳される場合である。以下、表 1 7、1 8 はこの細分化に従って her+k の表 1 0 を分割した統計である。

	k 総数	her+(k→k)総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL/BR 現訳	263	31	11.1%	1	<u>3.2%</u>	14	45.2%	16	51.6%
NL/SCH 現訳	293	9	3.1%	4	44.4%	3	33.3%	2	22.2%
TR/KR 現訳	274	29	10.6%	1	<u>3.4%</u>	5	17.2%	23	79.3%
TR/H 現訳	219	28	12.8%	5	17.9%	13	46.4%	10	35.7%

表 1 7 her+(原文 k→現代語訳 k)の出現数 (率)

	k 総数	her+(g→k)総数		単一 her		D 複合 her		P 複合 her	
NL/BR 現訳	263	18	6.8%	1	<u>5.6%</u>	3	16.7%	14	77.8%
NL/SCH 現訳	293	11	3.8%	5	45.5%	2	18.2%	4	36.4%
TR/KR 現訳	274	14	5.1%	7	50.0%	1	7.1%	6	42.9%
TR/H 現訳	219	13	5.9%	7	53.8%	0	0.0%	6	46.2%

表 1 8 her+(原文 g→現代語訳 k)の出現数 (率)

最初に、訳者のスタイルの問題を見ておこう (表の枠付きの出現率)。NL/BR は単一 hin の出現率(3.2%, 5.6%)が著しく低い、この傾向は上で見たとおりである。また、表 1 7 では TR/KR の単一 hin も NL/BR と同程度に出現率(3.4%)が低い。¹⁶

¹⁵ 原理的にはその他の組み合わせである hin+g, her+g, hin+k も同様の細分化は可能であるが、これらの組み合わせの場合には一方のデータがないか、ごくわずかであるため考察対象とはしない。

¹⁶ TR/KR は表 9 の hin+k の出現率(9.5%)も著しく低く、TR も BR 同様、単一、D 複合、P 複合 hin/her の出現率のバラつきが比較的大きいと思われる。

全体的には表 1 7 と 1 8 では出現率のバラつきがかなり異なる。すなわち、表 1 7 の $k \rightarrow k$ では訳者別、her のタイプ別のバラつきが比較的大きい。表 1 7 と表 1 8 を統合した表 1 6 でもバラつきが比較的大きかったが、 $k \rightarrow k$ は実数が $g \rightarrow k$ よりも多いため、表 1 5 では $k \rightarrow k$ の性質が強く反映していたということである。一方、 $g \rightarrow k$ の表 1 8 では、NL/BR を除く NL/SCH, TR/KR, TR/H の単一 her と P 複合 her の出現率が類似し、バラつきが小さい。また、P 複合 her の出現率と僅差ではあるが、単一 her がもっとも出現率が高い。単一 her の出現率が高いたとも高いことは、他の表 7 から 1 0、表 1 7 と比べて特徴的である。

それでは、なぜ表 1 8 の her+(原文 $g \rightarrow$ 現代語訳 k) では単一 her の出現率が高いたであろうか(NL/BR を除く)。これは、当該の単一 her の箇所を原文に遡ることで理由がわかる。すなわち、NL/SCH の 5 例のうち 2 例は soln と共起し、TR/KR の 7 例のうち 6 例、TR/H の 7 例のうち 5 例は命令形で用いられているが、「ここ」への移動の命令には D 複合 her, P 複合 her では余剰的に感じられることが単一 her の出現率が高いたことの理由になっていると考えらる。ただし、NL/SCH, TR/KR, TR/H では P 複合 her の出現率も単一 her と同程度に高いが、これにも以下のような理由がある。

表 1 9、2 0 は上の表 1 6 を $k \rightarrow k, g \rightarrow k$ に細分化した場合の統計であるが、ここでは表 2 0 が問題になる。¹⁷ 表 2 0 の NL/SCH, TR/KR, TR/H を見ると、NL/SCH では herab1 と herein1, TR/KR では herab1 と herein3, TR/H では herein5 において原文でも同じ P が現れることがわかる。すなわち、表 1 8 で P 複合 her の出現率が単一 her の出現率に近くなるのは、訳者が原文の影響を受け、原文と同じ P を付加した her を現代語訳でも用いる傾向があることが理由になっているということである。

	P 複合 her+($k \rightarrow k$)における P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	<u>heran</u> 5, <u>herbei</u> 6, <u>herauf</u> 2, heraus2, herein1	16	81.3%
NL/SCH	<u>heran</u> 1, <u>herab</u> 1	2	100%
TR/KR	<u>heran</u> 11, <u>herbei</u> 5, <u>herüber</u> 1, herein6(3)	23	74.0%
TR/H	<u>heran</u> 3, <u>herbei</u> 3, <u>herunter</u> 3(1), heraus1	10	90.0%

表 1 9 P 複合 her+(原文 $k \rightarrow$ 現代語訳 k)

	P 複合 her+($g \rightarrow k$)における P のタイプと出現数	計	移動過程系 P 率
NL/BR	<u>heran</u> 7, <u>herbei</u> 1, <u>herab</u> 2(2), heraus2, herein1(1), einher1	14	71.4%
NL/SCH	<u>heran</u> 2, <u>herab</u> 1(1), herein1(1)	4	75.0%
TR/KR	<u>heran</u> 1, <u>herbei</u> 1, <u>herab</u> 1(1), herein3(3)	6	50.0%
TR/H	<u>heran</u> 1, herein5(5)	6	16.7%

表 2 0 P 複合 her+(原文 $g \rightarrow$ 現代語訳 k)

¹⁷ 表 1 9 と 2 0 の比較では、いずれにせよ移動過程系 P 率が高いが、表 1 9 の $k \rightarrow k$ のほうが若干高い。

4. おわりに

本稿では、渡辺（印刷中）の補足として、hin/her+g/k を細分化した hin+g, her+g, hin+k, her+k の統計にもとづく考察をおこなった。考察の中心は現代語訳であったが、hin/her+g/k 総数のみを対象とした渡辺（印刷中）の考察では見えなかった、hin/her+g/k の組み合わせの違いによるさまざまな違いが確認された。基本的には、渡辺（印刷中）で見た P 複合 hin/her の発達を確認されたが、あらたに D 複合 hin+k, 単一 her+(g→k) の発達も確認された。さらに、P 複合 her+k の her は他の P 複合タイプとは異なり、P は移動過程系 P の場合が多いことも確認された。また、別の観点からの違いであるが、訳者のスタイルによる出現率の違いもいくつか確認された。

残された課題としては、1) 本稿で使用した資料は NL/BR のそれぞれ二つの現代語訳であったが、さらに別の作品、現代語訳を考察対象にすること、2) 現代語訳に一般的にみられる傾向と訳者のスタイルの傾向の切り分けの検討、3) データの細分化に伴い母集団、出現数が小さくなり妥当性に問題が生じることの検討、4) 翻訳研究の中で本稿でおこなったような考察はどのように位置付けられるかの検討といったものがある。これらの問題の考察は今後の課題としたい。

参考文献（本文で言及したもののみ。その他の参考文献は渡辺（印刷中）を参照されたい）

Hoffmann, W. (2004): Ein mediävistischer Bestseller und sein Konkurrent. Zu den Übersetzungen des 'Nibelungenliedes' durch Helmut Brackert und Siegfried Grosse. In: *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur*. Bd. 133, H. 3 (2004), pp. 293-328

Latzel, S. (1979): *Der Gebrauch von „hin“ und „her“ im heutigen Deutsch*. Goethe-Institut.

渡辺伸治（印刷中）: 「gehen/kommen と hin/her におけるダイクシス性と視点性 —現代ドイツ語と中高ドイツ語の比較対照的考察—」『ドイツ文学』166.（日本独文学会）

執筆者紹介（掲載順）

井元秀剛（IMOTO, Hidetake）

言語文化学専攻 言語認知科学講座

王 周明（WANG, Zhouming）

言語文化学専攻 コミュニケーション論講座

高橋克欣（TAKAHASHI, Katsuyoshi）

言語文化学専攻 言語認知科学講座

瀧田恵巳（TAKITA, Emi）

言語文化学専攻 コミュニケーション論講座

春木仁孝（HARUKI, Yoshitaka）

大阪大学名誉教授

渡辺伸治（WATANABE Shinji）

言語文化学専攻 コミュニケーション論講座

（2023 年 3 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2022

時空と認知の言語学XII

2023 年 5 月 20 日 発行

編集発行者

大阪大学人文学研究科言語文化学専攻